

「おぢいさん、御免なさい、私は今やつと今までの考へのまちがつたことがわかりました。ほんたうの人間になりました」と手をついてわびますと、爺やも「いや俺もお前がかわいさにあんまり分にはすぎた慾をおこしてゐた。どうせこの小槌はたゞ俺が貰つて來たのだから、俺には崇りも遠からず來ようが、その罰をうけるまでは心をかへて働かう」と申しまして、ふたりはすぐに東京にかへりました。かへつて新に商ひを始め、むかし村で御用ききをしてゐたと同じ心もちで熱心に働くことに致しましたが、その店開きの晩に、爺やお直も同じ夢を見ました、その夢の中には大黒様がニコニコと現はれになつて、
「長吉、お直、奢る心は小槌で打ち込め、むかしの心にかへつたら崇りも罰もゆるすぞよ」とおつしやいました。ふたりはそのお言葉を守つて一層精出しますと、次第に人からも敬はれ、行くする幸せに暮しましたとき。

四五 日本 の 旗

相撲を取るのを見てゐますと、どつちか一方が勝てばよいと、直きに最員の心がおこります。戦争をする時にもやはり同じことです。むかし日本が露西亞と滿洲で戦争をした時に、寶ちやんといふ支那の少年が日本軍の最員をしました。そのため、日本の軍隊がたいへんはげしい戦争にも勝つことが出來た、といふお話があります。

寶ちやんの家は滿洲のひろい野原の中にある百姓家で、土塀をめぐらした内には豚だの鶏だのをたくさんに飼つてゐました。

日本と露西亞の戦争が始まりますと、間もなくこの寶ちやんの家のすぐ前へ

多くの露西亞の兵隊が来て陣地を構へました。

それを見た寶ちやんのお父さんは、寶ちやんと母さんとを遠くの村の親類にやることにしました。

しかし寶ちやんは、父さんといつしよにゐて戦争を見物するのだといつて、どうしても母さんと行かうとはしませんでした。

さて明けの日になりますと、露西亞の兵隊が寶ちやんの家へ来て豚だの鶏だのが欲しい、といひました。そこで寶ちやんのお父さんは、望みの数だけ渡しますと、露西亞兵はそれを取るばかりで、お金をちつとも拂はうとはしませんが、父さんは困りました。

次ぎの日もまた來ました。やつぱりたゞで鶏を取つてゆきました。お金はすこしも拂はうとはしませんから父さんは「あんまりひどい」といつて陣地ま

でお金を取りにゆきますと、多勢の兵隊が、あべこべに父さんをひどい目にあはせました。

こんな風ではのこりの鶏も直きにみんな取られてしまふだらうから、どうかして、今の中に匿しておかうとかう考へて、父さんと寶ちやんとは鶏を一羽づつ翼と肢とを紐で結はへますと、裏の砂場に頭だけ出さして埋めました。その後幾日か経ちました。ある日露西亞兵の陣地へ日本兵が攻めて來ました、そして忽ち陣地を占領してしまひました。

すると寶ちやんのところへ今度は日本兵が鶏を買ひに來ました。寶ちやんのお父さんは、日本兵もやつぱり露西亞兵のやうに、たゞで鶏を取つて行くのだらうしと思ひました。

『鶏は一羽もをりません』と答へました。處が折が悪く、その時裏の砂場に

埋まつてゐた牡鶏が、砂の上に頭を出して『コケコッコ』と元氣よく啼きました。それをきくと日本兵はよろこびまして、すぐ懐からお金を出し、それを父さんに渡して、

『さアこれだけでよいから賣つておくれ』といひました。父さんはお金を見るたびつくりしてよろこびました。早速日本兵を裏へ案内して、そこに埋めてある鶏を好きなほど取つてゆきなさい、といひました。日本兵は面白がつて鶏を掘り出し、お金を拂つて持つてかへりました。

これから寶ちやんの家では、日本兵が来るたびにいつもよろこんで迎へて、深切にもてなしました。寶ちやんはまた時々この日本兵隊の陣地へ遊びに行き、家から卵だの、お餅だのをもつていつて上げる事もありました。すると兵隊だちはよろこんで、寶ちやんに恤兵袋からハンカチだの繪葉書だのを出して

呉れました。そんな風でしたから寶ちやんも寶ちやんの父さんも『ほんとに日本兵は深切だ。こんな兵隊のをる國に勝つて貰ひたいなア』といふやうになりました。

すると或る日の午後不意にまたひどい大砲の音がひびきました。寶ちやんがとび出して見ますとすぐ前の野原で物凄い闘ひがはじまつてをります。

處がその時露西亞兵から打ち出した大砲が一發寶ちやんの家の屋根の上で破烈しました『アツ』といふ間に火事となり。見る見る寶ちやんの家は燃えましました。

闘ひはだんだんはげしくなつて、彈丸はボンボン飛んで來ます。寶ちやんと、父さんとは命からがら逃げ出しましたもの、一里も逃げのびました時ふたりはとんでもないものに出會ひました。

それは馬車にのつた露西亞兵で、この間よく寶ちやんの家へ鶏や豚を取りに来たひとなのです。この露西亞兵が寶ちやんの父さんを見ると、
『日本の犬待て！』といつて馬車から跳び下り、辨髪を引搦んで撲りつけました。

『何をなさる！』

『司令部へ来い、日本の犬奴、よく今まで日本兵の爲に間牒をはたらいたな』
『間牒、それはとんでもないこと』

『申譯はいらぬ、無禮者さア立て！』といひますと、父さんをそのまま馬車にのせてガラガラ引き出しました。寶ちやんは驚きました。

『お父さん、お父さん』と泣きながら後から追つかけてましたが、何分むかうは馬の足、直きに遠くへだつて、たうとう見えなくなつてしまひました。

あたりには村も家もありません。見えるものは背よりも高くのびた高粱ばかりです。寶ちやんは途方にくれて道の真中にくつたりとすわりました。

『あゝ口惜しい、なんといいふひどい露西亞兵だらう、父さんは何も日本のためになさりはしないのだ。唯日本兵が深切だから、こちらも深切にしてあげたばかりなのだ。それを間牒だの、日本の犬だの、といつて父さんをつれてゆくとひどいあんまりひどい、そんな亂暴なことがあるものか。さうだ、私がいつて父さんの罪のないことを申しひらきをしなればならぬ。この道の、この馬車の轍の痕さへたどつてゆけば屹度ゆけやう。さうだどんなに遅くなつても行かなけりやならぬ』とかう考へますと、寶ちやんは元氣を出して立ち上り、いつしやうけんめいに歩き出しました。

處が一里いつても二里いつても、歩いて歩いて同じ高粱畑の中の一筋道

です。足がつかれるお腹がすく、その中に日がどつぷりと暮れてしまひました。

寶ちゃんはそれでもなほ這ふやうにして歩いてゐますと忽ち左手の高梁の中がざわざわと音がして、道のまん中へ跳び出した者、見ると大きな露西亞兵です。劍のついた銃を構へて、くら闇にじつと寶ちゃんを透してゐましたが、

「誰だ！」とどなりました。

「僕、ほ、寶ちゃんです」

「……なんだ、支那人の子か！」

「さうです。僕の父さんがちつとも悪くはないのに、露西亞の兵隊さんが司令部へつれていつたから、僕その云ひ譯に行くのです」

「なんだと？」

「ええ父さんは、ちつとも悪くはないんです」

「ははア、ちやお前はあの間牒の子か。……そんな奴が此處へ何しに來たか」といふかとおもふと、その露西亞兵は銃の臺尻を以て寶ちゃんの胸をドンと突きました。

「あッ」といつたきり寶ちゃんはその場に氣絶してしまひました。

それから寶ちゃんはどうなつたでせうか、何んにもおぼえがありませんでした。が、暗い廣い野原の、遠くの遠くでしきりと寶ちゃんを呼んでゐるものがありますので、寶ちゃんは、はやく返詞をしたい、と思ふがどうも聲が咽喉につかへて出ません。やつとそれがこたへられた時に氣がつかますと、寶ちゃんは暖かい部屋の中で、髯の白いお爺さんに抱かれてゐるのでした。

よく見るとそのお爺さんは、寶ちやんの家へよく来たことのある学校の先生で、家もその先生の家ですから寶ちやんはどうしてこんな處へまで連れられて来たのか、不思議でなりません。すると先生は、

「氣がついたか、あゝよかつた、ほんとによかつた。お話は後からゆつくりするからまア今晚は静かにお休み」といつて胸に藥をぬつたり、頭を冷したり、いろいろ手當てをして下さいます。そこで寶ちやんはいはれるまゝに静かにその夜は休みました。

明けの朝、もう胸の痛みも去つて、元氣がでましたので、寶ちやんは起きて先生から昨夜の模様をききました。先生のおつしやるには、昨日戦争があつた上に、火事まであつたときいたので、子供たちの家はどうなつたかと思つて、夕方見舞ひに出かけると、幸ひ誰もたいした怪我をしたものもなかつたが、唯

一軒、寶ちやんの家だけは焼けてをる。やれやれ家の人たちはどうしたらうかと、あちこち捜して見たがどうもわからぬので、若しや焼け死にでもしなかつたらうかと心配をしいしい歸へると、むかうの道の真中に小さな者が倒れてをる、そのぐるりを野良犬が四五匹で取り捲いて、モ少してくわへて行かうとしてゐるので、あわて、追つばらつて抱き上げて見ると寶ちやん、お前が息をしずにあるではないか。びつくりして抱いてかへつて、手當てをしたのだが、ほんとうに助かつてよかつた。家も焼けたし、その上父さんも露西亞兵につかまつたのなら、當分先生の家にゐたがよい。露西亞の司令部はすぐこの後の村にあるから、折を見て父さんの罪のいひひらきをしたがよからう。まアまア暫らく休んでをるがよい」と深切にいつて下さるのでした。

寶ちやんは先生のお言葉をたいへんにうれしく思ひました。その上、父さん

の捕へられなさつた司令部が、後の村にあるときいたので、すぐにもいつて見たくなりました。

そこで気分もよくなつた次ぎの朝、寶ちゃん先生は先生のゆるしをうけて裏に出て見ました。見ると土堤の上にこんもりと茂つた大きな楊の樹、その一番高い樹に登る足掛けが出来て、その上に旗がたつてゐます。その旗は上は白中は藍下は赤と三段になつてをるのはあの露西亞の國旗です。

「あゝ露西亞だ、あの亂暴な兵隊の立てたのだ」と思ふと腹が立つてたまりません、つかつかとその楊の立の下までゆかうとしますと、不意に寶ちゃんは跪きました。と、その拍子に何か露西亞の言葉で叱るものがありますので、びつくりして見ますと、すぐ傍の中から、大きな露西亞の見張り兵が寝呆けた顔をしておこすのでした。

「御免なさい」と寶ちゃんはやまりました。

「なんだい、ひとがいゝ氣持ちで休んでゐる處を……」

「はい御免なさい、僕あの旗ばかり見てゐたものですから……」

「あアあねむい、ほんとに失敬な奴だ」

といふ様子は別にひどい目にあはせさうにもありませんので、寶ちゃんはびくびくしながら、

「兵隊さん、あの楊の樹の上に登つてもようござんすか」とたづねました。

「なに？　あの楊の樹に？　あそこにア俺が登つて見張りをする處だ」

「ちやあなたは今見張りをなさらないんですか」

「ウム、あんまり眠たいからちよいと休んでゐた處だ　はつはつは……」

「さうですか、ちやねえ兵隊さん」

「なんだ」

「僕あなたの代りにあの樹の上へのぼつて見張りをして上げませうか」

「お前に出来るか？」

「出来ましても、日本の兵隊が来ればすぐ知らせたらいってせう？」

「さうだ、それでいゝのだあの向うの森かげか、あつちの土堤か、それでなければあの道か、若しあそこから人影がポツチリでも見えたら、すぐ俺に知らせるのだぜ」

「え、ようござんす、その代り僕に あなたの帽子をお貸しなさいよ」

「よろしい、そらちやも一時やすむぜ」

寶ちやんは露西亞兵の大きな盪のやうな帽子をかぶつて、大威張りて楊の樹

の上へのぼりました。

楊の上から見ると廣い野原が一目に見えます、先生の家の前から通つてをる帯のやうな路、それから遠くにポツポツと石ころをおいたやうな中に、一つだけ黒く見えるのは寶ちやんの家の焼け跡ではないでせうか、氣がつけばすぐ眼の下から左へつゝく土堤の前に壕が掘つてある、その壕の中に露西亞兵がごろごろしてゐます。それも頭を寄せてトランプを打つてゐるもの、グウグウ銃を枕にして眠つてゐるもの、お酒をのんで歌をうたつてゐるもの、どれを見ても陣地の護りをしてをるやうなものは一人もありません。寶ちやんはこんな時に、不意に日本軍が攻めて來たらどんなだらう、と思ひました。

さう思つて寶ちやん、向ふの森かげの土堤の上を見ますと、不意にポツリポ

ツリと一寸法師の頭が二つばかり見えましたが、がそれはちきにかくれてしまひました。

『はてな、日本兵かな』

じいつと見てゐると、また一寸法師が十人ばかり土堤の上を越して、前の梁島にかくれます。寶ちやんは思ひました、これは日本兵が攻めて来たのに相違ない。あの深切な兵隊の日本兵、僕たちを可愛がつて下さる日本兵が、亂暴な露西亞兵にかはつて此處を護つて貰つたら、どんなに安心が出来よう。さうだ、司令部においてになる父さんも屹度日本兵が見つけたら助けて下さるに相違ない。とかう考へますと、すぐ樹の下にをる見張り兵が、身をかいて寝てゐるのをさいはひに、寶ちやん、だまつて堅睡をのんで見てゐました。

すると向うでは土堤の前へ次ぎから次ぎから一寸法師が現はれては梁畑にか

くれますもの、二百人あまりも土堤を越しますと、忽ちズドーンと大砲が一發、寶ちやんがあわて、

『はやくはやく日本兵が見えましたよ』

とよびますと、樹の下の見張り兵はびつくりして跳び上り、

『何處だ何處だ！』

と、うろろうします。その中に日本軍から大砲や小銃や機關銃などつゞけざまに打ち出しましたので、壕にゐた露西亞兵のうろたへやうつたらありません、銃をあべこべに構へるもの、背囊倒まに擔ぐものそれはたいへんな騒ぎです。

寶ちやんは楊の上からそのをかした様子を見て、

『はやくはやく、日本兵が勝つやうに』と心に念じてをりましたが、その中に一發、日本兵から打ち出した彈丸でせう、寶ちやんのゐる眞上の空でバンツと

破裂し、その破片が寶ちやんの額を打ちました。

「アッ」と思ふ間に、寶ちやんはころころズドンと楊の上からおつこちました。

寶ちやん落ちるとはねおきましたが、その時自分のすぐ側を澤山な露西亞の豫備隊が通りましたので見てゐますと、土堤の前へ出るとすぐにボンボンと打ち出します。機關銃も出る、野砲も出る、俄にひどい恐ろしい勢ひが加はりましたので、日本軍が折角前へ前へと進んでも進むたびにこの露西亞軍の彈丸を受けてばたばた斃れます。

「口惜しい！ 日本が負けては仕様がなない」と寶ちやんは血をたらしながらまた立ち上りますと、先程まで樹の上高く立つてゐた旗が竿共折れて落ちてゐるのを見つけました。寶ちやんは急いで拾ひあげて、

「さうだこれをもつて日本が勝つやうに振つてやらう」

と思ひましたが、氣がつくとそれはいやな露西亞の國旗だ、寶ちやんはすぐその旗を引き裂きました。ほかに代つた切が、と思つて衣囊へ手を入れますと、いつか日本兵から貰つた廣いハンケチがある、

「さうだこれがよい」と寶ちやん、いそいで旗竿に結へつけやうとしましたが、見るとこれではたゞの白旗です。

「日本の旗は赤い日の丸！ よし！」と叫んだ寶ちやんは、その白い切れを額の傷口へ押し當てました、したゝる血が染りますと忽ち見るもあざやかな日本の丸が出来ました。寶ちやんは旗竿に結びつけ、それを片手で打ち振り打ち振り楊の上へ登りました。

この寶ちやんの振る日の丸の旗は、急ち日本軍の隊長の眼に止りました。すると隊長は躍り上つてよろこび、

『やア日の丸日本の援兵だ！ 我が軍の援兵がもうあの右側の土堤にあらはれたぞ。もう一息だ突つ込めえ！と突撃の號令を下しますと、今まで傷ついて跛になつたり、腕を打たれたりした兵までが、忽ち元氣を盛りかへし、血みどろになつて進みました。』

その凄まじい勢ひに驚いた露西亞兵の尻ごみをした一人が、不意に楊の上うへに日本の日の丸を見たとたいへん、

『あそこにも日本兵が』

『やア挟み撃ちだ、早く退却！』

『逃げる逃げる』といふ聲に忽ち戦線が總くづれ。あわてうろたへて逃げ出し

ましたので、たうとうこゝに日本の軍隊が、敵の半分もない人數で、立派にこの陣地を占領することが出来ました。

それから暫らくたつと日本軍の後方にゐた大隊も駆けつけまして、大隊長が勇ましく陣地占領の式を行ひ、天皇陛下と日本帝國の萬歳を唱へましたが、それにしても今日の戦闘は實に不思議な勝ちであつた、僅か一個中隊くらゐでは進む中に全滅するばかりなのに、敵の側面に何處かの隊が出て日の丸の旗をふつてくれたので、そのために勝てたやうなものだ、がそれにしてもそこにあらはれた隊は何處の隊か、日の丸を振つた兵は何といふか。と大隊長が、列んでゐる中隊長たちに尋ねますと、どの中隊長も、皆知りません、解りませんと答へます『では副官、あの楊の傍へいつて檢べて見てこい』と命ぜられて、大隊副官は馬をとばせて楊の下まで行きますと、そこには兵隊のかけも見えませ

ん、が、樹のすぐ下に小さな支那の子供が、額から血をたらして倒れてゐます。その片手には血で染めた日の丸の旗がしつかり握られてありますから、

「やッこの兵隊だ！」と副官は思はず馬から跳び下りました、

「しつかりしろ、お前は偉い！ 死んぢやいけないぞ」

と涙ながらに寶ちやんを抱いてまた馬に跳びのりしますと、拍車をつよくあてて駆けさせながら、

「大隊長殿！ おましたおました！ 旗を振つたのはこの兵隊です！」

「何その子供が！」ときいては大隊長もびつくりしましたが、何にしても死なしちやならぬ、軍醫よ看護卒よ、と呼んで手當てを加へますと、寶ちやんは間もなく気がたしかになつて眼をばつちり開きました。

丁度そこへ、司令部から日本の兵に助け出された父さんも來合せましたの

で、寶ちやんは芽出度く父さんと會ふことが出來ました。

健氣な寶ちやん、日本最員のこの支那少年は、父さんと一しよに大隊長から褒められ、すぐ母さんともいつしよになつて日本の東京へおくられ、そこで幸せな日を送るやうになりましたとさ。

四六 金の穂拾ひ

喜恵子の父さまと母さまとは、東京から一日くらの汽車に乗らなければ行けないほど遠い國の、山の中においてになつて、石の中からお金を採る仕事をしておいでになります。そのため喜恵子は伯母さまの家から學校へ通つてをるのでした。

處がこの頃どうしたことか喜恵子のところへお父さまからもお母さまからもちつともお便りが無いのです、喜恵子は心配で心配でたまりません、毎日學校ら歸へると伯母さまに「只今」も申上げないで、

「お手紙はまだ？…伯母さま」と訊ねるのでした。伯母さまも、やつぱり心配していらつしやいますが、喜恵子にはそんなそぶりをお見せにならず、

「ええまだよ、でも大丈夫、お忙しいことがあるからお手紙もかけないのでせうよ。お忙しいことさへあれば、屹度お金が澤山に儲かるんだから、その中直さに喜恵ちゃんのことへよいおたよりがときますわ」。

「さうでせうかねえ」

「喜恵子は氣遣はしさうに答へるのでした」

あんまり心配をしたせい、喜恵子はある晩いやな夢を見ました。それはお

父さまもお母さまも、山の奥の巖屋の中で石をコツコツ砕いておいでになりま、と雪がフワフワ降り出して一尺二尺と積り見る間にその巖屋の入口を埋めてしまふのです、喜恵子はびつくりいたしました。いそいで鋤を持ってその雪をかき除けますが、除けても除けてもどうしても巖屋の入口まではゆけません。その間もだんだん降り積る大雪が、たうとう喜恵子まで埋めてしまひさうです。喜恵子は思はず「お母さまア」と呼びますとその拍子にふいと眼が醒めたのでした。

朝起きると喜恵子は伯母さまにこの夢のお話をいたしました。その後で、

「伯母さま、私こんな夢まで見るんですもの、屹度お父さまやお母さまがどうか遊ばしたに相違ないと思ひますわ。ですから伯母さま、今度の二日續くお休みに、山まで見に行かして下さらない？」といひますと、伯母さまは、

『まア……お前がひとりであの山へ……』
と驚きになりました。が喜恵子は一度思ひ立つたことは何しても仕通さなければ承知の出来ない性分ですから、伯母さまも伯父さまと御相談の上で兎に角喜恵子のいふなりにおゆるしになり、汽車をはなれてから山までの道はその田舎にいらつしやる、伯父さま御友人に案内をして頂くことに電報でおたのみ下さいました。

喜恵子はおほよろこびで、その夜の汽車にのり、夜通し旅をつやけてあけの日の午後首尾よくその田舎に着きました。

處がその停車場まで迎へに出てゐて下さる筈の伯父さまの御友人が、どうなさつたのかお見えになりません。喜恵子は途方にくれましたが、氣が立つてゐ

る時ですから「いゝことよ、ぼんやり待つてゐやうより、夕方まで行けるところまで行くわ」とさういつて、元氣よく田舎の路をいそぎました。

すると山の麓近くまで来た時にもうお日様が山へおかくれになりました。

『おや、もうこんなになつた、今日中にはとてもゆけないわ。何處かに宿屋がないかなア』とあちこち見廻しながら歩きましたが、生憎そのあたりには百姓家さへありません。喜恵子は歸ることもならず、その上足もだいぶ疲れて痛くなつて来ましたので、早く何處かで休まうと元氣をふりしぼつて急ぎます中に、もうどつぶり暮れて暗くなつた頃やつと森の蔭に小さな燈火を見つけてました。

『まア嬉しい、やつと家が見つかつたわ』と喜恵子はよろこんで駆けつけて見ますとそこには壁に蔦の這ひまつはつた小さな家がありました。中からウン

ウン苦しうな呻り聲がきこえるのです。喜恵子はギョツとしました。そうつとあかりの洩れる窓から覗きますと、家の中には氣味の悪いくらゐ皺だらけな婆さんがひとりてやすんでをりました。その枕元にはうす暗いランプがぼんやりともれて居るばかりで、他にはなんにもありません。喜恵ちやんは、見ると氣の毒でたまらなくなりました。急いで枕元へいつて、

『お婆さん、どうなさつたの。お苦しいんですか』とたづねますと、婆さんは底光りのするやうな凄顔で喜恵ちやんをじいつと眺めながら、

『何處から來たのちや、何か食べ物を持たないのか』と申します。

『たべ物！あゝ私お辨當にサンドキツチを澤山に持つてゐますわ、お婆さんはお腹が空いたんですか』

『さうちやその辨當を早うおくれ』

『ええいくらでもお上りなさいよ、そらこんなに澤山あるでせう』といつて喜恵子は手提袋に残つてゐたお辨當をみんな取り出して婆さんにやりました。婆さんは爪の伸びたうす汚ない手を出して掴みながら、

『これはうまさうちやのう』とムシヤムシヤたべるともたべるとも、三度分もあつた包を見るまにすつかり食べてしまひました。

『まア驚いたお婆さんは、随分召しあがるのねえ。あのう婆さん私今晚こゝで泊まらして頂戴な』

『いくらでもお泊り、その代り夜があけたら早う食べ物物の仕度をするんだよ』

『食べ物物の支度？ あのお婆さん御飯を焚くんですか』

『そんなことは當り前ぢや。あんあんあア、あアお腹がすいた、あゝ苦しい』

喜恵子はびつくりしてしまひました。しかしよけいなことをいうては叱られ

さうですから、その晩はをとなしく婆さんの腰をなでたり足をさすつたり、すなほに介抱をいたしました。

裏の鶏小屋で一番鶏が啼きますと、婆さんはもう喜恵子に

『朝食の支度をしなよ』と申します。喜恵子はいはれるまゝに起きて、お米が何處にあるんですか、と尋ねますと、婆さんは、

『裏の畠に落ちてをるわ』と申します。

『畠にお米が落ちてゐますの？』

と問ひかへしますと、

『さうちや畠に穂が落ちてをる、それを早う拾うて挽き割るのちや』

『まア穂を拾つて來るのですか』

『さうちや、ちやから早うせんと遅くなる。あゝお腹が空いた、あゝ苦しい』

喜恵子は困つてしまひました。然しいひつけをきかないと婆さんはどんな恐ろしい顔をして叱るかも知れないので、いはれるまゝに裏の畠へ出て見ますとまだ夜があけませんのであたりは真暗ですが、足許を見ると、あつちにもこつちにも稻の穂だけが金色に光つて見えました。喜恵子は驚きながらその穂を一つづつ拾ひますうちに、忽ち兩手に一束となりました。それがピカピカ光つてそのなかなか重たいのでやつと持つてかへり、

『お婆さん、拾つて來ましたよ』といつて見せますと、婆さんは一目見るなりたいへんにおこり、

『誰がそんな者を拾つて來いというた。そりや金ちや、金が人間の餌食になるか』と怒鳴ります。

「あらだつてお婆さん、裏の畠にはこんな穂しか落ちてゐないんですもの」と申しますと、

「それちやから人間の子は嫌ひといふのちや。いけない、いけない、早うそんなものを鶏にやつて、森の栗の實を拾つておいで、栗の實を……栗を栗を……あゝお腹が空いた」と申します。

喜恵子は何だかよくはわからないけれど、婆さんがいふ通りにしなければこわいものですから、素直に拾つた穂は鶏にやり、いそいで森へ栗を拾ひに行きました。

森には栗が澤山に落ちてゐました。喜恵子は早速拾ひますとその栗は鐵のやうに重たいのです。

「あらいやだこの栗もまたヘンだわ」といひながら兩の袂に一ぱい拾ひ取つてかへり、婆さんに出しますと、婆さんは呻りながそれを見て、

「またちや、また栗の實を銀にして來おつた……これ見い、これが栗か、銀の實ぢや、人間の子はこんな者を喰ふつもりか阿呆娘、あゝ苦しいあゝひもじい、そんなものは兎にくれてはやう水を汲んで來い。早う井戸の水を汲んで來おらぬか」
「はい……はい……今すぐに」

喜恵子はいはれる通り栗の實を庭にゐた兎にやり、柵の壺を持つて井戸端へ行き水を汲みました。

釣瓶に汲んだ井戸の水は水晶のやうにきれいです。喜恵子はこのところは婆さんに叱られることもあるまいと急いで壺をきれいにすゞぎ、一杯水を汲み取

つて婆さんの處へもつて行きました。

婆さんはウンウン呻りながら、急いでその壺を受け取るとその儘口にあて、コクリと一口呑みました、が忽ち壺を投げだして、

『血ちや血ちや、人間の血を飲ませおつたぞ』というなりガバと蹶ねおきて、喜恵子目がけて飛びかゝつて來ました、

喜恵子は思はずキヤツと叫んで逃げ出さうとします。すると婆さんの投げ出した壺がボカリと破れますと、その中からおそろしい炎が燃え立つて見る間に婆さんの家一めんの火となりました。

喜恵子はうつかりしてゐると、火傷をします。それでも婆さんの體を案じながらうろろしてゐますと、後から、『喜恵ちゃん早く喜恵ちゃん早く』と袂をひくものがあります、見ると落ち穂をやつた鶏がいつか大きな金色の鶏と變つ

て、

『はやく私におのりなさい、はやく私にお乗りなさい』と申しますので、喜恵子は思はずその頸につかまると、鶏はひよいと喜恵子を背中へのせ、そのまゝ、高く飛び立ちました。

後には炎が家をすつかりつゝんでもう婆さんの呻り聲さへきこえません。

喜恵子を乗せた鶏は、風を切つて飛びますうちに、だんだん夜が明けました。

『私これから何處へ行くのだらう』と喜恵子は鶏に尋ねました。すると鶏は飛びながら、

『あなたのお父さまやお母さまのおいでになるところへ……』と申します。

「まアお前さんはそれを御存じ？」

「存じてゐますとも、ですが喜恵ちゃんごらんない。あの向うの崖の下に洞窟があるでせうあそこに獵人の爺さんがゐて、目つかつたらまたひどい目にあひすよ」

「まア、さつきのお婆さんのやうに」

「ええ、油断が出来ませんよ」

といつて鶏はその崖の上を思ひきり高く飛び超えやうとしましたその時、

「ズドンツ」と一發の筒の音に、鶏は「ケケツ」と泣きましたか忽ち兩翼をひつくりかへして宙返りをしましたが、そのはずみに喜恵子は脊から逆りました。鶏の頸にぶら下つたまゝ、サツと下の方へ落ちてゆきました。

はつと氣がついた時には喜恵子は崖の突端の巖の上にをりました。が見れば

たつた今までしがみつゐてゐたとばかり思つてをりました鶏はもうゐなくなつて、喜恵子の體は山の中には珍らしい柔かい藁の中に倒れてをるのです。すると耳元で、

「これ、これ氣がついたかの」

太い聲がしますので、喜恵子は起き上がりますと、白い髭を伸ばした獵人の爺さんが手に鐵砲を持つて立つてゐます。

「そちはなんぢや」

「喜恵子でございます」

「何、生糸だと、鶏がなつた藁のお化か」

「いえ喜恵子と申します」

「生糸か喜恵子か知らないが人間の子供ちや仕様がないわ、こつちへ來い、畏

番でもさせてやらう』

喜恵子きゑこを連れて洞窟へ入りました。

喜恵子きゑこはどうなることかと、慄えながら爺さんの後から行きますと、ブンと鼻をうつ血腥ちまぐさい匂ひ、見るとあたりには鹿だの猪だの、いろんな獣や鳥の死體がうづ高く積んであります。

『喜恵子、朝飯をたべたかな』

『はい……いゝえ』

『ちや、こつちへ来ておたべ』

石の皿に盛つて出されたものは兎の太腿。

『よッ』といつて喜恵子きゑこはたろろぎましたが、こんな處で隙を見せてはどんなに酷い目にあふかも知れませんが、氣を取り直して、

『お爺さん、私もうお腹が一ぱいですから頂きません、何なりと御用をおつしやつて下さい』と申しました。

『ほう、いやなら食はなくてよい。前の森の中に罾がかけてあるちやによつて、あそこへいつて岩の蔭で見張番をするのちや』

『はい何かその罾にかゝるのでございますか』

『懸るとも懸るとも鹿でも猪でもひつきりなしに懸るがな、山の奴等は逃げることも上手ちやによつて、懸つたらすぐ打ち殺さぬと獲れぬのちや。お前が岩のかげで番をしてゐて、懸つたらすぐ俺の處へお知らせな』

『はい、畏まりました』

喜恵子きゑこはすぐ前の森へゆきました。

巖蔭いはかげに小さくなつて腰こしを下くだし、ほつと吐息といきをつく間もなく、毘ひがバサツとひさましました、喜恵子きゑこはびつくりして跳とび出だして見ると、大きな枝角えだつののある鹿しかが重いおもい縮しめ木ぎに頸くびを壓つぶされてジタバタしてをります。

『あら鹿しかが……可哀かあいさうに』と思おもはず獨ひとり言ことをいひますと、

『喜恵きゑちやんお助けたすけ、はやくお助け下ください』

『あら駄目だめよ、お爺ぢいさんにさういつてからでないといけないわ』

『お爺ぢいさんにおつしやるうちに死いにます。ああ苦くるしい、はやく助たすけて……助たすけて下ください』

いはれて見ると氣きの毒どくでたまらなくなりましたので、喜恵子きゑこは後あとを見い見みい傍そばへ寄よつてその重いおもい縮しめ木ぎを外はずしました。

やつとよろけて毘ひからのがれた鹿しかは嬉うれしさうに角つのを振ふり、

『喜恵きゑちやん誠まことに有難ありがたうございました』とお辭儀じぎをして森もりの奥おくへ逃にげこみました。

『一度ひとおちた縄なわはお爺ぢいさんに知しれるだらう、さうだ鹿しかの身代みしろりにこれを懸かけておきませうよ』とさういつて喜恵きゑちやんはすぐ近ちかくの木蔭こかげにあつた丸太まるたを轉ころがして來きて毘ひに引ひつ懸かけて岩蔭いはかげにかへつて來きました。

すると爺ぢいさんが尋たづねました。

『喜恵きゑ子こや、まだ毘ひに懸からぬか』

『はい……いゝえ……たつた今鹿いましかが來きたやうでしたわ』

『ナニ鹿しかが來きた、何故なぜ早く知しらせないのでか』とブツブツいひながらやつて來きて、毘ひの傍そばまでゆきました。見ると大きな丸太まるたが懸かつてをりますので、爺ぢいさんは眞赤まっかに怒おどりました。

『そら見ろ、うつちやつておくと、もうこれだ、いまいまい、鶏を撃つたら
藁になるし、鹿が懸ると思ひやア丸太になりくさる、剛慾婆さん奴、今朝から
大分御機嫌がわるいと見えるな』

『お爺さん、剛慾婆さんつてどなたのことですか』

『麓でお前の泊つた家の婆さんぢや、お前が婆さんに情をかけたから悪いのぢ
や。え、何を食はせて来たのか』

『はいサンドキツチを三度分』

『それ見ろ、それがいけない。山の金か土塊さへ食はせておけば動けないの
に、人間の食ふものをやつたりするから悪戯をはじめるわ』

『困りましたねえ』

『だから尙更早うこの山の生物を獲絶やさなければならぬわい。さ、今度はし

つかり見張りをすのぢや、よいか今度逃がしたらお前を罠にかけてしまふぞ』

『はい』

爺さんは洞窟にかへりました。喜恵子はまた岩陰に見張りをしてをりました。
見張りをしながら、思ひますにはこの爺さんも麓の婆さんもみんな恐ろし
い人たちだ。こんな人たちのすむ山の上の坑窟に、金を吹きつけてゐらつしや
るお父さまやお母さまも、やつぱりこの人たちが殺してしまつたのぢやなから
うか。かう思ひますと喜恵子は心配でたまりません。

するとバサリツ罠に何か懸りました。

駈け出して見るとそれは可愛い小兎です。

『あら可哀さうに』

『喜恵ちやん早く、お助け……』

『ええすぐに助けてあげるわ、静かになさいな』

喜恵子はそつと兎を締め木からはづしてやりますと、その後へ石ころを置き
ました、兎が助けられて嬉しうにピョンピョン二三度はねます、と忽ち大き
な銀色の兎とかはりました。

『喜恵ちやん、はやくお乗りなさい、早くお乗りなさらぬと爺さんが追っかけ
て来ますから』

いはれて喜恵子はその兩耳をつかまへて背にヒヨイと飛び乗りますと、兎は
ピョンピョン森の奥深く逃げました。

森をこし崖をよちまた谿を渡りしてだんだん山の奥へと駆けてゆきます中
に、小さな鑽石の小山まで来ました。兎はその小山の周囲を二度三度グルグル

と跳びまはりましたが、やがて喜恵子を脊からおろしますと、

『さア喜恵ちやん、あなたのお父さんやお母さんは此處に埋つてゐらつしやい
ますよ』

『まアこの小山の中に』

思はず小山へ駆けのぼり、

『お父さまお母さま』と地面に顔を伏せて泣きました。

すると不思議にも、喜恵子の泣いたその涙が地面こぼれてみんな地の中に浸
み込み小山が一時に地震でもおこつたやうにふるへ出してバツと八方に裂けた
と見ると、その中から巖で疊んだ仕事の小屋があらはれました。

その暗い小屋の中に喜恵子のお父さまお母さまも、瘦せて汚れて病人のや

うな顔かほをしておいでになるではありませんか。
 喜恵子きゑこは夢中むちゆうに縫ぬりつき、暫しばらくはもう泣なき崩くづれましたが、氣きを取り直ただして、甲斐かひ甲斐かひしくお手をひき、日當ひあたりのよい原はらまでお連れ申まをし、兎うさぎが取とつて來きてくれます山葡萄やまぶどうの實みや、山梨やまなしの實みを絞しぼつてあげたり、氣きつけ薬くすりをすゝめたり、出來でるだけの看護かんごをいたしますと、お父ちちさまもお母かあさまもだんだん元氣げんきがついて來きましたので、喜恵子きゑこは大おほよろこび、幸さいひ畏おそで助たすけた鹿しかが母かあさん鹿しかと子こ供ども鹿しかとを連つれて來きて山の麓ふもとまで乗のせて出でると申まをしましたので、喜恵子きゑこ親子おやこの三人にんは三匹びき鹿しかに乘のりながら、芽出めでたく山やまを出でることが出で來きましたとき。

四七 二つの貝

晝顔ひるがほの花はなのしほれるやうな暑あつい日ひでありました。
 歌子うたこと濱子はまこは鎌倉かまくらのお友達ともだちを訪たづねてそのかへりに七里ヶ濱はなへ出でて、砂山すなやまの上うへで暫しばく休やすみしました。
 二人ふたりは涼すずしい風かぜをうけて、好すきなお唱歌うたがをうたつたり、濱はまで泳およぐ人の面おも白しろさうな遊あそびを眺ながめたりして居ゐりますと、そこへ古ふるびた經木きんぎの帽ぼうし子こをかぶり、肩かたから箱はこをぶらさげた爺ぢいやがよぼよぼと歩ありて來きました。二人ふたりの前まへまで來きますと、腰こしを伸のばしてうす氣味きみの悪わるい笑わらひを見みせましたが、
 『お嬢ぢやうさまがた、お土産みやげの貝かいを買かつて下くださりませんか、いろんな品しながござり

ますよ』と申します。

『お土産の貝。』

『はい、まあちよいと御覽遊ばせ』

さういつて箱の抽斗を取つて、二人の前に出しました。

見るとその美しいこと、白いのや赤いのや模様のあるのや、形も圓いのや長いのや、さまざまの恰好をしたのがあります。

『きれいなこと』

『襟止めにしたらいい、恰好ねえ』と二人は見て居ますと、爺やは、

『これは江の島の辨天様の前でなければ採れない品でございますよ。同じ子安貝でもあかにし貝でも、この邊の濱にうち上げますのとはまるつきり貝の光澤が違ひます』と一つ一つ持つては説明をしますので歌子もつり込まれて、

『ほんとに綺麗なこと』とその中のあかにし貝を取り上げました。

『お爺さん、これは何といふ名ですか』

『お、それですか、それは普通のあかにし貝ではございません、ちよいと耳にあて、御覽なさいませ』

『何かきこえるの？』

歌子はその貝を耳にあて、しばらく眼を見はりながら聴きました。

『歌子さん、何かきこえますか』

濱子も珍らしさうに歌子の顔を眺めてをりますと、爺やは別に一つ眞珠貝を取り上げて、

『これも何かきこえますよ』といつて濱子に渡しました。

『アラツ…アラツ』

『アラッ…アラッ』

歌子と濱子とは顔を見合して、さういひ合ひましたが、その中に歌子は驚いたやうに貝を眺めて、

『あらお爺さん、この貝はクン、クンつてなくのねえ、中に何が入つてをるの』と申しますと、濱子はまた、

『歌子さんの泣きますの、私のはさうぢやないことよ、なんだかはつきりとはきこえないけども。遠くてオーケストラでもあるやうに賑かなうつくしい音がいたしますわ』と申します。

『どれどんなに？』

そこで二人は貝を取りかへて聴きあひました。すると歌子のきいたのは管絃樂で、濱子のは動物の泣き聲がかすかにきこえました。

爺やはにこにこしながら、

『とうです、奇妙な貝でせう、一つ宛買つて下さいな。おまけ申しておきますから』

二人は面白くなつて、とうとうこの貝を一個づつ買ひました。

尤もそれは歌子は管絃樂のきこえる眞珠貝を買ふことにし、濱子はまたクンクンと泣き聲のするあかにし貝の方が滑稽でもあれば形も面白いというて買ひ取ることにしました。

二人はこの妙なお土産を持つて東京へ歸りました。

歌子の家は東京の青山の街にあります。また濱子の家はそのすぐ隣の澁谷町にあります。二人ともその夜は草臥れましたので早くから休みました。

あけの朝、歌子はまだやすんでゐますとき夢うつゝともなく誰かが
『捨てるなよ』

捨てるなよ

捨てゝはならぬぞ』

といふやうなので、ふいと眼をさましますと、昨日鎌倉で買った真珠貝を入れておいた書物棚の上の手匣が、ひとりてブーブー唸つてをります。

『オヤ唸つてゐるわ、どうしたんだらう』

歌子は不思議になつてそつとそれを下し開いて見ようと思つたと、忽ちボンと蓋がはちいて、中から見ごとなヴァイオリンが飛んで出ました。

『オヤヴァイオリン！まア！』と歌子は暫くは言語も出ないくらゐびつくりしました。

欠

欠

「ね、歌子さん、繋ぐな繋ぐな、つていつた聲がまだ耳元についてをるやうですもの。この犬を繋いではいけないと思つてうちやつておきますと、もうかうして私の後をついてどうしてもはなれませんか、歌子さん、わたし何うしたら宜しいのでせう」といふのです。

歌子はそこで自分の買った真珠貝からヴァイオリンの飛び出したことを話しました。そしてその後でかう申しました。

「ほんとに困つたわねえ、あのお爺さんから最初見せてもらつた時に私があかにし貝の泣き聲をきいたのでしたわ、あのクンクンつていつたのは、それぢやこの犬だつたのでせうか」といひました。

濱子はそれをきくとせきこんで、

「さうなの、さうなの、ほんとうにさうなのよ、私は真珠貝の方を先に聴い

たんですもの、歌子さん私にもと通り取りかへて下さらないこと……』と申しま
す。

歌子は心よく、

『それは取換へてあげますわ、取換へてもようござんすけれども。もう今はこ
んなに變つてゐるんですもの』といひますと、

『でもこの犬を濱子さんの處において、そのヴァイオリンを私が戴いて歸つた
らよろしいでせう』

『でも、その犬が私の家に居りませうかしら』

『それはゐますわね、かめや、お前は歌子さんのお家のものになるんですよ』
といひふくめますと犬は、

『ワンワン』と吠えてかぶりを振ります。

『ほほほ、あれはいやだといふのですわ』

『困るわねえ』

『ほんとに困りましたわねえ』

ふたりは途方に暮れてしまひました。が歌子はその時またヴァイオリンのよ
い音色におもひついて、

『さうさう濱子さん、一寸おきき遊ばせな、このヴァイオリンはそれは好い音
色が出ますのよ』

『どれ、どんなに？』

歌子はヴァイオリンを取り上げると、靜かに弾きはじめました。その曲は二
人とも大好きな曲でしたが、高く低く急いてはゆるやかにきこえますので、い
つかそのよい音色に歌子も濱子もすつかり酔つてしまひました。

やうやく一曲を弾きをはつた歌子は、ホツとわれにかへつて、ヴァイオリンを胸からはづさうとしたその時です。今まで縁先でじいつとさいてゐました犬は、

『ワン！』と恐ろしく吠え立つとお座敷へ跳び上りました。

『危い！』と濱子の止める間もおそく、歌子の肩先きに噛みついたからたまりません。歌子はその場にうちたはれました。

歌子は正體もなく病院へ搬ばれました。やつと母の顔の見えたのは、その日も夕方のことでありました。

氣がつくと歌子は母の手につかまりながら、

『お母さま、あのヴァイオリンはどう遊ばしたの、今まで何方か弾いていらつ

しやいましたでせう」とたづねます。

『ヴァイオリン、あれはどなたも弾いてはゐませんよ、家においてあります』

『さう、でも私にはあのヴァイオリンを誰かついて弾いでるやうにきこえましたわ、……ではねお母さま、すぐあのヴァイオリンを濱子さんのところへ、持たしてやつて頂戴な』

『まア何をおいひだね、あの様な恐しい犬の居る處へ、誰が持つて行くものですか、もうこれから後は濱子さんとは御交際は止めなさいな』

『いゝえいけませんの、それはいけませんの、あのヴァイオリンにも犬にも深いわけがあるのでございます、ですから濱子さんにあのヴァイオリンをお上げ下さい、そしてあの犬を家へ引き取つて下さいな、どうぞね、お母さま』

と申しますので、母は歌子がこんなにまでいふのをこの上さからつたら病氣

にもさはるだらうと思つたので、すぐ宅へ電話をかけ、竹やにヴァイオリンを持たせて濱子の家まで届けさせることにいたしました。

さて濱子は今朝一まづ家にかへりましたが歌子の怪我が氣にかゝつてじつとしてをることが出来ません、といつて見舞にゆけば犬がついて來ますので、歌子の病氣にはなほ悪いかもしれませぬ。どつちへ考へても昨日鎌倉で具を買つたことがわるかつた。今後この犬が濱子について歩き、歌子にヴァイオリンのある間はいつでも一緒になつて遊ぶことも出来ぬだらう、と、思ひかなしんでをりました。其處へ歌子の宅から竹やがヴァイオリンを持つて來ました。そして犬を連れて歸る、といふのです。

その歌子の傳言をきいて、濱子は一層苦しい思ひをいたしました。がやつと

心をきめました。

『竹やさん、御苦勞様でございました、ヴァイオリンはたしかに頂きました、が、犬はお上げ致しません、私は歌子さんと仲悪くしようとするやうなものは犬もヴァイオリンもお互ひに持つてゐてはいけないと思ひます、いつまでたつても今まで通り、親しいお交際が出来ないのでございますから、今からすぐこの犬もヴァイオリンもあの濱の爺やに返しに行きます、どうかさうおつしやつて下さい、歸るとすぐにお見舞に行きますから、歌子さまにお大切に遊ばせとさういつて頂戴な』といひますと、濱子はそのまゝ、ヴァイオリンを抱へ、犬をつれて家をかけ出しました。

濱子は汽車の中も夢心地で鎌倉の七里が濱までつきました時は、もう日が暮

れて、きれいな月が上つてをりました。

砂山？ 昨日の貝賣りの爺やに會つたあたりまでゆきますと、丁度漁師がひとり海から歸つて來ました、濱子は「貝賣りの爺やの家は何處にありますか」とたづねますと、漁師は濱子の顔をジロジロ見てゐましたが、

「お前さんが貝賣の爺に今頃會ひたいつて？ ありや變人ですぜ」と申しま

す。

「變人つてどんな方ですか」

「ははは。いや變り者のことよ、なんでもこの頃は家が何處にもないもんだから、アレ、あの海に突き出した岩があるだらう、あの蔭に寝おきをしてをるちうことだ」

「まア、あんな處にですか」

「さうだ、今頃行つたら月をながめて謠曲でもうなつてゐようぜ」

「さうですか、どうも有難うございました」

濱子はいそいでその海につき出た巖までゆきました、見ると巖と巖との間に寝おきの出來さうな處もあります、が何處にも爺やが見えませんが、

「ちいやさん、ちいやさん、貝賣のちいやさんはいらつしやいませんか」

と呼んでも答へがありませんから、屹度何處かへ出かけたのだらう、歸つて來るまで待つてゐよう、とさう思ひまして、巖の上に腰を下しました。

濱子は足下の巖角に月の影がうつつて金色に碎ける波の花を見ますと、急に今まではりつめた氣が弛んで來て、なんだか謠ふか弾くかして見たいやうな氣になりました、そこで歌子といつても一緒に歌ふ大好きな歌、それを弾いて見ようと思つてヴァイオリンを取りあげ、しづかに弾きますと、その好い音色、弾

く濱子がうつとりとなつてしまひました、自分がひくのか、それとも誰か来て弾いてくれるのか覚えがないやうになりました。

一曲終りますと、ホッと弓を糸から離さうとしますその時でした。傍の犬が『ワン』と吠えて濱子に跳びついたと見ると、ヴァイオリンを咬へて打ちよせる波を目がけ、ザンブと飛び込んでしまひました。

『まア』といつたその時は、濱子の手にはヴァイオリンがありません、傍に犬もをりません。

『うれしい！』と躍りあがつた濱子はそのまゝ、後をも見ずにかけてかへりました。

東京へ歸りついたのはもうあけの朝の事、すぐ病院に歌子を見舞ますとその時は歌子もすつかり気分がよくなつてをりましたので、濱子は昨夜の出来事を

くはしく語りました。

そしておしまひにかう申しました。

『ねえ歌子さま、これからは滅多にへんなものを買ふものではございませんねえ』

すると歌子も、

『ほんとに自分で災難を買つたやうなものでしたわ』といひましたが、それも暫くたちますと、もう二人は忘れたやうに楽しい心にかへりまして、すきな唱歌の合唱をいたしましたとき。

四八 鬼伏山

碌二は雲雀なく野を、丘の上まで摘み草にのぼりました、この丘の前には大川が、春の日をとかしてゆるやかに流れてゐます。その彼岸の新田村は家々の屋根の間を、淺黄に芽をふく柳の木、桃の花など、まるで碌二が學校で圖畫の時間に描く水彩畫のやうに見えます。

その上新田村の右の端には碌二がこの以前までは見なかつた新しい家が二軒も建つてをります、ちつと眺めるうちに川を渡つて賑かな石搗きの唄がきこえてくるのです。碌二は思はず、

『また新しい家が建つんだ』とつぶやいて、自分の村を見かへりました。

碌二の見かへつた大鳥村は、見るから淋しい村でした、立ち枯れの樹のある寺の森や屋根瓦のこはれてをる學校の屋根、それから村の中央の火の見櫓が倒れさうになつてをるのを見る時碌二は、

『どうして僕の村はこんなに貧乏なんだらう』と考へずにはをられないのです。

碌二は草を摘むのも止めて、芝生に足を投げ出し、いろんなことを考へはじめました、

するとそこへ、よちよちと杖ついでのぼつて來たものがありました、それは村で一番年寄りの久兵衛爺さんでした。

『碌坊、何をしとる』

『お爺さんほん、とにつまらないんです』

『つまらない？ 子供の癖にそんなことをいふものぢやない、早く蓬を摘みなさい』

『だつてお爺さん、僕たちの大鳥村はどうしてこんなに貧乏なんでせうねえ』
久兵衛爺さんは碌二のこの問ひをきいて俄かに眞面目な顔をいたしました。

『へッへッ、どうしてつて理窟があるもんか、貧乏人がをるから貧乏なんだ』

『だつて昔は新田村なんかよりはもつともつと身上のよい村だつたんでせう』

『さうだ』

『そして村祭には大きな山車が出たり、獅子が舞つたりしたつていふのに、今年の春の祭なんかはそりや淋しいんだから』

お爺さんはしばらく黙つてゐましたが、やがて溜息をもらして申しました。

『世の中は廻り持ちといふものぢや、榮える時があれば亡びる時も来る、碌坊、

子供はあんまり餘計なことを考へないで、せつせと働くものだぞ、な、早う草をお摘み！』

『だつてお爺さん、こんな蓬ぐらゐ摘んだつて仕様がなないもの』

するとまたお爺さんは思ひ出したことでもありさうに、じいつと暫く立つてゐましたが。

『碌坊、お前はこゝがどういふ處か知つてをるだらうな』といひました。

『此處ですか？ こゝは鬼伏山つていふんだから鬼がねてをるんでせう』

『いゝや鬼ぢやない鬼ぢやない、村のものは鬼というてをるがの、ほんとうは鬼ぢやない、こゝにはわし等の村の、昔の殿様が御座るのぢや』

『えッ！村の殿様？ こゝにですか』

碌二は全く驚かすにはをられませんでした。

「お爺さん、それはまたどういふわけなんです」

「この話は村でも知つてをるものが澤山にあるまい、が古い古いわしの家の書き物にはちやんと載つてをるのちや」

「それはどういふ話です」

「むかしこの村に城を構へてゐた殿様は大層な我が儘者であつた。近所界限から無闇やたらに年貢米を取り上げる、若し命令に従はぬものがあれば、すぐ捕へてこの川に抛り込む、村の者はこの殿様のお通りだときくと、戸を閉めて匿れたものちやさうな」

「亂暴な殿様ですなえ」

「そこでそのいちめられたものどもが大きに腹をたて、寄つてたかつてこの殿様を攻めたてた、そりやえらい騒動がはじまつたやうちや、そこでたうとう

殿様をこの丘のある處へ持つて来て、生き埋めにしたといふことちや」

「この山へ！」と碌二は思はず眼を圓くしました、さうちや、この處へ埋めたのちや、處が殿様は埋められながら、夜な夜な恐ろしい聲で唸る、その聲といふのは恐ろしい大きな聲で村の者もおちおち寝ることも出来なかつたさうちや、そこで村の者はその上へ土を盛り上げ盛り上げて唸りのきこえなくなるまで土を盛つたので、たうとうこの鬼伏山が出来上つたといふことちや」

「驚いたなア」

「その殿様が埋められる時、この村が殿様に加勢もしないで見物してゐたので、殿様はうらんで村の者にいつたさうちや、わしが亡くなつた後はこの村がほろびるまで祟つてやるつて」

「驚いたなア？」

『その祟りで、このやうに村がだんだんすたつて来たのぢやらう』と久兵衛爺さんは太い息をつきました。

『お爺さん、それぢやこの鬼伏山を崩してしまつたら村がだんだん身上がよくなるでせうか』

『ほうそんなこともあるまいな、さ碌坊貧乏がいやならせつせと働くことぢや』といひますな、お爺さんはよろよろと川上の方へ立ち去りました。

碌二は尙しばらく芝生に坐りながら考へつゝけてゐました。

碌二の父さんは村の學校の先生です、父さんと母さんと碌二とが、この村に来て學校の宿直部屋に住むやうになつたのは今から十年も前のことですから、碌二は今ではこの村を自分の村として愛してをるのです、その自分の村が貧乏

なのは鬼伏山があるからだと聽かされたので、若しやそのやうな祟のある山なら早く取り崩して大川へ流してしまつたがよからう、そしたら新田村のやうに身上のよい村とかはるのであるまいか、とも考へました。

するとその時この山の下へ若い陸軍の少尉が來ました、双眼鏡を持ちながら丘の上へ駈けのぼつてあちこち眺めてをりましたが、碌二がそこに坐つてをるのを見ると、につこりして、

『君、大森街道はむかう？』 そら、今自轉車の走つて居るあの村だねえ』とたづねました。

『さうです』

『ぢや雀の森は？』

『雀の森はあれです』

『あアさうか』

少尉は暫らく双眼鏡で見てもましたが、やがて思ひ出したやうに、

『それちやこの山は？』

『この山の名ですか』

『さう、この小山に何か名がついてをるの？』

『こゝは鬼伏山です』

『鬼伏山！ 剛氣な名だねえ』

『さうです、鬼伏山だから困つちまふんです、この山があるから僕の村は貧乏になるんですつて』

『なに？ この山があるから村が貧乏する、そりやまたどういふわけかえ』

少尉は腰の刀を外して地に突きさし、其に火をつけて碌二の傍に腰を下しま

した。

碌二は少尉にたづねられて今爺さんから聞いた話をそつくり語りました、そして『だから僕はこの山を早く崩してしまひたいんです。こんな山は早く崩してしまはなけりや村はいつまでたつても貧乏するんですもの』といひますと、少尉は碌二の手をしつかりと握つて、

『さうだ、よくいつた、君、村をそのやうに可愛がる君は立派な愛國者なんだ、君は偉い、然しその方法を過るな、いゝかえ、こんな山を崩したところで身上のよくなる譯はない、そんなけちなことを考へないで、一層のこと、この鬼伏山の上に大きな洋館を建てるつもりでやりたまへ、いゝかえ君、君がたつた一人でも出世したら、偉い人間になつたら、この村は忽ち立派な村だ、よい村になるのだ、さうだらう、君が話したやうに、殿様の生き埋めを見物しながら助

けもしないやうな者が、この村に一人でもゐたなら駄目なんだぞ、よし、愉快な少年だ、君の名は何といふの？」

かういつて、握つた碌二の手を強く打ち振りました。

碌二は何と答へやうもなく、唯じいつと少尉の顔を見揚げましたが、その眼は悦びの色に輝いてをりました。

四九 峠の提灯

村の用ききをして、毎日町まで通る徳平爺やには、彦太郎といふ一人の孫が

ありました。

彦太郎はかはいさうにも啞でした、それで十三の今日まで、學校へ上がることも出来なければ、奉公することも出来ず、毎日家に留守居をして草鞋をつくるのが仕事でありました。

それも徳平爺やが出あるいてばかりをりますので、誰一人たづねて来るものもなく、まことにさびしい日をおくらなければなりません。

彦太郎には友達は一切ありませんでした、もし彦太郎を訪ねて来るやうな少年があつたら、それは啞をなぶらうとする村の悪戯兒でありました。

この彦太郎にも唯一つうれしいことがありました、それは毎日夕方になると村ざかひの峠まで出て、爺やを出迎へることでした。ちいやは重い荷車をひいて、ウンウンいつてのぼつて来るのですが、それを彦太郎は峠の上から見つけ

ますと、駈けていつて荷車の後押しをするのでした。

闇の夜には爺やが小田原提灯をともして歸りました。彦太郎が出迎へるのにもやつぱり爺やと同じ形の小田原提灯を持つて出るのでした。

徳平爺やが重たい荷車を曳いて汗みどろになりながら歸ると、峠の上には彦太郎の提灯が見えます、その時のうれしさ、すぐ『おうい』と呼びもしたが、情ないことにはいくら大きな聲を出して呼びましても、彦太郎にはきくことが出来ません、ですから爺やはその代りに、自分の持つてをる提灯を振ることにしてゐました。彦太郎がそれを見ると同じく雀踊をして、持つた提灯を高くうち振りながら駈寄るのでした。

徳平爺やはだんだんと年を取るにつれ、往復八里もある城下の町まで通ふことがよほど難儀な事になりました。そのあひだに彦太郎はだんだん大きくなつ

てゆきました。爺やのかはりに用ききの用事をつとめることは、いつになつてもできません。唯一緒に行つて爺やの荷車の後押しをするか、さもなければ爺やの代りに車を輓くだけのことですが、そのやうにふたり共城下に行くよりは、彦太郎が留守をして草鞋を造るはうがよつほど生活のたしともなりま

すので、徳平爺やはいつまでも自分で城下がよひをいたしました。この國に高い神々しい山がありました。この國の男が生れてから一人前になるまでには是非一度この山へのぼらなければならぬことになつてゐました。

ある夏のはじめに、この村の少年達は多勢でこの山まわりをすることとなり、その見送りやらお祝ひやらに徳平爺やは、方々の家からいろいろな買ひ出しを頼まれました。

その夜爺やは圍爐裏端で、明日の用意をしながら、傍に草鞋をつくる手をや

すめのない彦太郎を見て、思はずほろりといたしました。
『ああ、この子も今年が十三だ、満足に産れてゐてくれたら村の若連中と一緒に山参りをさせてやるものを、なんにも知らずに山まわりの草鞋をつくつてゐる』

爺やはさうおもふとたまらなくなりました。

あくる朝、爺やが町へ買ひ出しに行つたあとで、彦太郎は軒下に出て草鞋を造つてをりました。するとその日、この家の前を彦太郎と同じ年の村の少年たち、白いかたびらを着たり、新しい菅笠をかぶつたりして、みなうれしそうに山まわりに出かけるのが通りました。彦太郎は草鞋造る手をとめてちつとその姿を見おろしてをりました。

その晩に徳平爺やがいつもよりはおそく、重い荷をつけてかへりました。

峠近くなつて、爺やはもう彦太郎の提灯が見えさうだとおもひましたが、どうしたものかその夜は提灯は見えませんでした。爺やは不思議におもつて、疲れもわすれて、峠の上までいそぎのぼりました。

すると、不意に村の鎮守の森の大杉の枝に彦太郎の持つてをる筈の提灯がポカリとあらはれました。あまりにも不意な個所に現はれましたので、爺やは驚きました。その中に提灯は枝をはなれて爺やの方へ飛んでまわりました。徳平爺やは膽をひやして見てをりますと、やがてその提灯は爺やのすぐ上まで来た時に、バツと消えました。闇の坂にバサリといふ音、そのはずみに何處かていやな鳥が一聲啼きました。

徳平爺やは顛へあがりましたが、なんと考へたものかその儘念佛をととなへな

がら、よぼ／＼車をひいて村の方へと下りてゆきました。
立山まわりの少年たちはめでたくかへりましたが、彦太郎の姿はその日からとうとう、この村に見ることができなくなりました。

五〇 さいはひの鐘

ぐるり中山で囲まれた谿間に、さびしい村がありました。村の人たちは朝日を迎へるのも山の上、夕日を送るのも山の上ですが、なにぶんその東の山も西の山もたいへんに高いものですから、お日様のお顔を見る間がいつも短かく、

欠

欠

て下さるですよ』

『それはそれは有難うございます』

『あなた、あそこまで歩けますか』

『え、もうあそこまでくらのなら這つていもまわります』

『さう、僕も急ぎの用を持つてゐなければ送つて上げたいが……ちや氣をつけておいてなさいな』

『どうも有難うございました』と、その旅人は思つたよりは元氣よく、聖堂の方へと行きました。

日出坊はあけの朝、眼がさめますと、もう外が明るくなつてゐます。

『はてな、今朝は鐘が鳴つたらうか、姉さん、今朝鐘が鳴りましたか』とたづねますと、その姉さんも今しがたやつと起きたばかりの顔をして、

『今朝まだ鐘が鳴らないわ、長兵衛爺さんはどうしたんだらうねえ、もう六時は過ぎてゐてよ』といはれて日出坊はギクツとしました。あの長兵衛どん、鐘つきをはじめてから今日まで、まだ一度も休んだことも間違つたこともない長兵衛どんが、今朝にかぎつて鐘をつかぬとはをかしい、若しや昨夕出會つたあの旅の人が……、と思ひますと、心配で心配でたまりませんから、日出坊は、急いで東の山の聖堂までいつて見ました。

するとその聖堂の前にはもう村の人達が多勢集まつてゐましたが、入口の鐵の戸がびつたり締まつて明かないといつて大騒ぎです。牧師さんが見えても明かねば、鍛冶屋が鍵を持つて來てもどうしても錠前があひません、打つてもたつても聖堂の中には長兵衛どんがあるやらゐないのやら、内は森としてちつとも様子がわかりませんので、村の人は困つてしまひました。

そこへ日出坊が來たのですが、黙つてゐることが出来ませんので、集まつてゐる人に、昨夕村の辻で出遇つた變な旅人のことをそつくり話しました、そして若しやあの旅人と何處かへ出かけたのではなからうか、と申しますと、氣のはい人たちは、

『そりや悪者だつたに相違ない』

『いや魔者だつたらう、長兵衛どん、あんまり人が良い人だから、すつかり魔者に誑されて、何處ぞへ連れ出されたのであらう』といふ者がありますと、また、『そんなら聖堂の戸は長兵衛どんが歸るまでは明けることが出来ぬ、鐘も鳴らしやうもないから、まアまア歸るまでうつちやつておかう』といふものが出て、そのまゝ、村の人達は今日限り聖堂の戸を明けないことにきめてしまひました。

いや、明けやうにも石造りの巖丈な建物です、その鐵の戸は打ち破りでもしなければとても明きはしませんので、全く長兵衛どんの歸るのを待つより仕様ががないのでした。

それから鐘の鳴らない日がつまきました。然し當分の内は幸ひ、村の人たちもいくらか時間を守る習慣がついてゐましたので、別に朝寝坊が殖えるでもなく、お腹の空いた十二時にはお腹の中で鐘がなり、子供が眠る晩の八時は、お目々にチンカンの鐘が鳴つて、別に不自由も感じませんでした、が一月たち二月たち、やがていやな長雨の日が続くやうになりますと、いつかその習慣のねちも弛んで、學校にはぼつぼつ朝寝坊も殖えました。村には怠ける人たちも多くなりしました。

處が、さうなると第一に困つたのは日出坊と姉さんです。今まではふたりが

村の家々から用事をたのまれても、そのお駄賃はその度に定りよく仕拂はれましたが、鐘がなくなつてからは、つひその定りも崩れて来て、

『日出坊、今日はちよいと小さなお錢がないからお駄賃は次の日に一緒にあげるよ』などといふ者が多くなり、日出坊が折角一日汗水たらして働いても、空手で歸るやうな日が次第に殖えて來ました。

この姉弟にはかなしい年が暮れました。クリスマス晩となりました、村のどの家でもさすがにこの日は賑やかに、思ひ思ひの遊びや御馳走をして祝ひますので、朝からその仕度に忙しく、日出坊はもうはうばうの家から引張り風のやうに用事を頼まれました。

あんまり忙しかつたものですから、日出坊はお午の食事もぬきにして、晩遅くまで働きつけ、寒のシトシトと降る中をひよろひよろ疲れて歸りますと、

家では姉が薄暗いランプの下でまだお針仕事をついであります。

『姉さん唯今、あゝ疲れた……姉さんもまだ仕舞はないの』

『え、日出ちやん、姉さんも今日こそほんとに目がまはりさうだつたわ、いまやつとおしまひになりさうだけど、あゝほんとに忙しい目にあつたこと』

『さう？ 姉さん、僕まだお午の御飯もたべないんだもの、お腹がすいちやつたの、はやく御飯を食べようよ』

『あらッ日出ちやんもまだなの……まア姉さんもやつぱりまだなのよ、でもね姉さんはなんだか今日はお腹がちつともすかなかつたからだけど、……日出ちやん、お鉢は戸棚に入つてゐるから出してお上りよ、……ほんとにクリスマススの晩だつていふのに、何にも御馳走は出来なかつたわ、御免なさいな』

日出坊は戸棚をあけてお鉢を出しました。蓋を取ればその中には冷たい御飯

が一膳がかりしかありません。

『おや姉さん！……これつきりなの！』

と日出坊は思はずほろりとなりましたが、姉さんを見ますと、姉さんはもう兩袖を顔に當てゝゐます。

『日出ちやん、御免なさいよ、ね、姉さんが悪かつたわ、ほんとに、姉さんは人さまの御用のことばかりに氣を取られて、私たちのいたゞくお米の用意をすつかり忘れてしまつてゐましたわ』

『いゝえ姉さん、……姉さんが悪くはない、姉さんがちつとも悪くはないんだ。僕が毎日仕事に出てもちつともお錢を持つてかへらないんだもの、今日だつて……今日だつて、丁度朝から十三軒もの御用をしたんだけど、何處の家でもちつともお駄賃を呉れないんだもの……ほんとに困つたなア』

『ほんとに、クリスマスの晩だといふのに、こんなにこんなに頂く御飯の仕度さへしないつて、姉さんはわるいわ、わるかつたわ、日出ちやん御免よ、私どうでもして支度をして来るから、暫らくまつてゐて頂戴な』

と姉さんは立ち上らうとしました、すると日出坊はあわてて止めました。

『姉さん、いゝの、我慢をませう、何にも僕たちが悪かアないんだもの、姉さんだつて僕だつて、こんなに人さまのために働いてゐるんです、屹度神様が御覧になつていらつしやるんだ、ねえ姉さん、こゝにあるだけの御飯をふたりで食べて、クリスマスの讚美歌をうたひませうよ』と日出坊が健気に申しますので、姉も勵まされて涙を拭ひました、ふたりで淋しいかなしいクリスマスの夕の食事をとりました。

それから二人は『主は來ませり』の讚美歌をうたひました、それから去年聖

堂であつたクリスマスの樂しかつたお話など話し合ひ、どうか一日もはやくあの長兵衛爺さんが歸つて来て、村に幸の鐘が再び鳴りますやうに、と神様にお祈りをいたしますと、ふたりはさびしい心でやすみました。

ふたりは床に入りましたが、どうしたものが氣が立つて、ちつとも眠れません。あつちへごろり、こつちへごろり、寢返りばつかりうつてゐますと、外はさらさらと吹雪になりました、壁の破れ目から寒い寒い風が吹きこみますのに、いよゝ日出坊は縮まりながら、次ぎから次ぎへといろんなことを考へました。

するとかれこれ夜中の一時頃になつた頃でした。遠くの方から、

『オーイオーイ』と呼ぶ聲がきこえて來ました、日出坊は思はず頭をあげて聴

きますと、今度は『助けて呉れえ、助けて呉れえ』ときこえます、
『姉さん、人殺しだ！助けてくれつて！』といふなり日出坊ははね起きました。
大戸を明けてきくと、その呼ぶ聲はたしかに西の山の、隣村に通ふ路のあたり
ですから、日出坊は吹雪の中へとび出しました。

『日出ちやん危ない』と姉もその後について出ますと、日出坊は『姉さん、早
く行かないと死にますよ、オーイオーイ今行くよう』とよびながら雪の中を聲
のする方へ、道でも畑でもかまはずに、真直に駆けてゆきました

いつて見ると呼んでゐるのは、西の山の麓にある大きな池の中からです、そ
の池のぐるりが、水まで深い崖となつてゐますが、誰かその池の中へ落ちちた
のでした、くら闇でよくはわからぬが、アツプアツプと溺れながら崖ぶちにす
がつて呻るので、だんだん聲を出すことも出来なくなる様です『姉さん、誰か

溺れてゐるよ、僕助けて来るから！』

と日出坊はすぐにその池の中へ跳び込もうとしました、姉はあわてて抱き止め
ました。

『あぶない、日出ちやんつたら、こんな深い中へお前さんがとび込んだら、あ
べこべに溺れて死んぢまふぢやありませんか』

『だつて姉さん、だつてうつちやつとけばあの人は死んぢまふのよ、オーイ池
の中の人、今助けて上げるよう、…あゝ何かないかしら、何か引揚げるもの
が…』

と見まはした時、日出坊は自分の締めてゐる帯に氣がつかしましたので、急いで
解いて、先端を結んで、長く水際まで垂れました。そして池をのぞいて、
『そら帯を下げたから、その先きにおつかまりなさいな』といつて、静かにふ

つて見ますが、まだ深くて届かぬらしい。

『困つたなア、姉さんの帯もお貸しなさいよ』

『さう、姉さんは襷を持つてゐるわ、これをおつぎ』

と姉は袂から襷を出して渡しました、それを繼いで下げますと、やつと溺れる人はその先端につかまりました。日出坊は曳いて見て、

『オー重たい、姉さんも加勢して……さア拍子を取つて綱曳きのやうに引かうよ』

とふたりは氣合をそろへて引きますと、溺れた人も呻りながら這ひ上つて、間もなく崖の上にとざりと倒れました、闇でよくは見えないが、大きな大きな男です。

『まアピツシヨリ、濡れ鼠だ、姉さん、愚圖愚圖しとれば死ぬかも知れない、

早く擔いでゆきませう』

ふたりは両方から持ち上げようとしたが、その時、日出坊の手は男の頭のチヨン鬘に觸れました。

『やツ長兵衛どんだ、長兵衛どんだ、あの鐘うちの長兵衛どんだ』ととび上つて欣びました、それから、夢中に家まで昇いでかへり、それ火を焚いて、湯をわかして、濡れた着物は日出坊の小さな布子と取り代へてと、ふたりが真心こめた手當てには、一時蟲の息になつてゐた長兵衛どんも、やうやく元氣をもちかへして、明け方にはもうしやべられるやうになりました。

『お、有難い、日出坊、姉さん、よく助けて下さつた、おかげで俺も村の人だちにお詫びが出来来る、これ日出坊や、そこに乾かしてある俺の胴巻きをおくれ』と胴巻きを取り寄せて、その衣匣から取り出したのは、金色の小さな鍵でした。

『日出坊、これは聖堂の鐵の扉の鍵だ、すぐいつて聖堂をあけて、鐘を鳴らし
ておくれ』

日出坊は見えて躍りあがつてよろこびました。

『やア鍵！鍵！姉さん、聖堂の鍵だつて！うれしいなア』 その鍵を受け取る
とすぐとび出しました。

雪路を兎のとぶやうに東の山までかけのぼり、枯れ蕨のまつはる扉の錠に、
鍵をあてがひますと、その大きな扉はひとりてに左右に開きました、日出坊は
まだほの暗い聖堂の中を手搜りに鐘臺の上まで昇り、まる一ケ年鳴らなかつた
鐘の綱を曳いた時の心もち、殊にチンカーンチンカーンと幾つも幾つも勇まし
く打ち鳴らされる音に夢をやぶられた村の人たちの驚きとよろこびとはどんな
でありましたらう。

山も家も一面の雪に明けた村の麗しい朝ぼらけ、聖堂の前に馳せ集まつた人
たちは、日出坊の姉に助けられて来た長兵衛どんから、悪者のために聖堂を捨
て、長い間迷ひの旅にさまよつた次第をきいてびつくりし、また健氣な日出坊
姉弟の働きぶりをば口をそろへて賞めた、へましたが、はては長兵衛どんの望
みによつて、この日出坊姉弟は聖堂の鐘守として長兵衛どんと一緒に住むこと
になりました、その上日出坊は村のお金で學校へも上ることになりましたとき。
毎朝毎晩日出坊の手で打ち鳴らされる幸の鐘、それはこの物語をお讀みに
なつた皆さんにも屹度聴こえます、それチンカーン。

五一 鏡のお國

— 國 お の 鏡 —

きん子は鏡を見るのが、御飯をいたゞくことよりも大好きでございました。どんなに腹が立つた時でも、泣きたい時でも、大好きな鏡さへ見ますれば、きん子の御機嫌が直きになほつてしまふのでございました。じいつと鏡にお顔を撮しておめ、を見張つたり、お口をゆがめたり、につこり笑つたり、睨めつこをしたり、お齒々を出して見たり、お鼻を動かして見たり、それはそれは、まるで百面相のお稽古をするやうにして一人で遊ぶことが大好きでありました。

それですからまたきん子は、自分の嫌ひな物でも鏡に映すと、そんなに厭てはなくなりませす。美しいものや、大好きな者を鏡に映して見ましたら、もつともつときれいに、大好きになつて見えました。

— 國 お の 鏡 —

きん子のお家のお庭にはきれいな虞美人草の花が咲きはじめました。そのきれいに咲いた花園へきん子さんはひとりぼちでまわりますと、ベンチに腰をかけて、すぐに大好きな鏡を取り出して、花を映してながめました。

そのきれいなこと、『まるで紅色の蝶々のお國のやうだ』と夢中になつて眺めてゐますと、今まできん子のお髪に結んであつた月見草色のリボンがふいに動き出して、可愛い翅のはえた小人と化りました。

『あらをかしい』といふうちに、その小人はきん子の耳元に口をあて、

『きん子さん、きん子さん』

『はい、はい、何の御用？』

『私と一しよに鏡のお國へまわりませう』

『あら鏡のお國、きれいでせう？』

『それはきれいな處でございますわ』
『ちやすぐ連れていつて頂戴な』

『ちやおめをおとちなさい、そら私がこの杖の先の鈴を三度振るまでじつととちてゐてね、三度目が鳴り止んだらお明けなさい』

『ちや閉ぢることよ』

きん子はいはれた通りにおめめを閉ぢました、すると耳元で小人の鈴がチリンチリン、チリンと三度鳴りました。

そこできん子はひよいと眼を開きますと、まア綺麗なこと、いつか翅のある少女と一しよに廣い廣い湖水の上を、虞美人草の花びらのやうなお船に乗つて漕いでゐるのでした。

『おや此處は何處ですか』ときん子は尋ねました。するとその少女は大急ぎで

自分の口に人差指を當て、見せました。——と思ふ中に、きん子は俄にものがいへなくなつたやうに思はれましたので、お口に手をやつて見ますと、お鼻の下がつるつるして、すつかりお口がなくなつてゐました。『おや』といはうにも『まア』といはうにも、お口がありませんので、たゞもうもぢくするばかりでありません。

すると少女は氣の毒さうに申しました。

『きん子さん、御免なさいよ、鏡のお國ではどなたもお口がなくなるのでございますの、その代りにこのお國ではお腹もすかなければおしやべりをするのもなんにもございませんの、欲しいものは心に思へばすぐにまゐりますし、いひたいことはなんでもその方に通じます、でもたゞ一つ、お口がほしいといふことだけはお望みどほりにならないのでございますよ、そら、御覽なさいまし、

向うにはもうこの國のお城が見えてまわりました、さアさアはやく王様やお姫様にお目にかゝりませう。』

そのうちにお舟が、七色の寶石で築いたお城の前に着きました。するとお城の中から大勢のお口のない家來やお腰元たちがあらはれて、きん子を出迎へ、すぐ御殿に御案内いたしました。

御殿では王様やお姫様がきん子を一等よいお客様としてお待ちなさいました。きれいな音楽もはじまれば、子供達のをどりも始まります、また、きれいな花を澤山にお集めになつて、きれいなきれいな花行列や、花踊もお見せなさいました。

が、きん子にはこんなきれいなものを見たりきいたりいたしても、王様に御模様が申しあげること出れば、おほめをすることも出来ません。その上王

様もお姫様もきん子におめやお顔つきでいろいろおはしなさるやうではございますけれど、きん子にはそれがまだよくわからないのでございますから、なほ更じれつたくなつてしまひます。

おしまひにはもう悲しくなつて泣き出しさうになりました。

すると今まで傍についてゐました翅のある少女は、その様子を見ますと、

『あらッ、きん子さん、お泣きになつていけませんわ、この鏡のお國では涙が大禁物、一しづくでも涙をお出しになる方がありますと、この湖水にすつかり霧がこめて、何にも見えなくなつてしまふのでございますよ、オヤオヤさういふうちにもう湖水が曇りかけました。さアたいへん、早く歸りませう、おくれとお家へかへれなくなつてしまひますわ』といひますと、その少女はいつかきん子をうつちやつて、さつさと翅で飛んで歸ります。

きん子は思はず『ワツ』と泣いて後からおひすがらうと致しますと。そのはづみに、今まで持つてゐました鏡が手からすべつて、足元でカチリと音がいたしました。

『はッ』と思つてあたりを見まはしますと、いつか、もとの虞美人草の花の中、あわて、鏡を拾ひ取つて見ましたら、大切なお口がチャンとついてゐて、黄色いおりボンが、お耳のところてヒラヒラゆらいでをりました。

『あらまアをかしいわ、私何處へいつて来たんだらう、さうさうお口の無くなつたお國、まアいやなこと、でもきれいなお國だつたわ、ほんとに翅のはえた小人さん、有難うよ』といひながら、きん子はまたも鏡をじつと覗きました。

五二 炎の冠

窓の内では、清が童話の本を読んでゐました。窓の外では勇が雞に餌をやつたり、水をやつたりしてゐました。勇が雞小屋へ入つたり、雛を逐つたりしますから、大勢の雞が鳴き騒いで、清はうるさくて堪りません。

『勇。雞をかまふのをお止めよ。さわがしいぢやないか』

『だつて、兄さん、来て御覽、雞小屋に蟲がわいたやうですよ……』

『蟲だつてわかうさ、今王様の冠を取らうといふ最中なもの、お前こそ来てお聴きよ』

『王様の冠を取つて？ 兄さん、それは誰が取るの？』

『猫がさ！』

「猫が？ ははは、それぢや鼠の王様なんだらう」とはいひましたが、勇もその童話が聴きたくなりしました。

勇はすぐ雞小屋を出ると、部屋へ飛び込んで、

「兄さん、読んで下さい、早く早く！」とせきたてました。

清は静かに読み始めました。それは鼠の王様のお話ではありませんでした、年中花が咲き鳥がうたつてゐる美しい島の小さな優しい王様のお話でありました。王様は生れた時から仙女のお婆さんに冠せられた黄金の冠をかぶつておいてになりましたが、ある時この島に、むかしから一度もなかつた恐ろしい嵐が襲つて来ました。

草木の花は萎れ、鳥達は木蔭に頼へ、獣達は逃げまどつて、その騒ぎはたいへんなものでした。

その恐ろしい嵐の間に日が暮れました。島には一つの灯もありません。唯光といへば小さな王様の冠つていらつしやる黄金の冠だけでありました。その寶石で輝く黄金の冠を見つけました島の鳥や獣達は、みんな王様のところへ駆け寄つて、

「王様、お助け下さい」

「王様寒くて寒くてたまりません」

「王様暗くてこはくてたまりません」

「王様、王様、お腹が空いて死にさうでございます」

「どうかお早くお助け下さい」

と思ひ思ひに頼みました。

小さな王様は、それぞれ鳥や獣達の願ひをお聴き入れになりましたが、この

王様にはそれを叶へさせる力はございませんでした。

寒いといふ者に火を與へることも、ひもじいといふ者に食べ物と與へることも、恐ろしいといふ者に力を與へることも出来ませんでした。

するとこの王様が不斷お側にお置きになつた一匹の猫がありました、その猫は夜でも物が見えるつよい目を見張つて、王様の御様子をじつと窺つてゐました。

『力のない王様だ、役に立たない王様だ、こんな王様にあの冠を頂かせておくよりも、私が取つてかぶらう』とさう思ひました。そこで忽ち王様に襲ひかかつて、黄金の冠を奪はうとしました。

それを見た、狐も、狼も、熊も、虎も、ライオンも、黙つてはをりません。『その冠は私がかぶらう』

『わしによこせ』と、ぐるりちゆうから掴み合ひましたので、この島には、忽ち恐ろしい闘ひが始まりました。

それを御覧なつた王様は、今まで冠つていらしたその黄金の冠を取ると、空高くお投げ上げになりました。そして、

『火になれよ、燃え立てよ』とお叫びになりました。すると高く上つた冠は見る見る空で燃え立つて、あかるいあかるい炎の輪とかはりました。やがて舞ひながら、王様の上に下りて来てかぶさります頃は、嵐もぴつたり止みました。

それを見た猫も、狐も、狼も、みな驚いて自分の巢へかへり、鳥達は、再び木の枝にかへりました。

やがて島の夜は明けました。花は咲き、鳥は囀り、獸達も栖から出て、王様

のお傍へ行かうとしましたが、小さな王様の姿はあの燃え立つ炎の冠の消えるのと一しよに、お見えにならなくなりました。

勇はじつと聽いてゐましたが、不意に、

『兄さん、その王様はどこへいらつしやつたんでせう』と不思議さうに清の顔を見ました。

『さうだなア、ヘンなお話だねえ』と清も答へましたが、その時、二人のゐる窓の枠へ一羽の牡雞が飛んで来て、大きな聲で晨をつくりました。

それをきくと勇はたちまちに、

『あア、これが島の王様なんだ』と叫びました。

『どうして？』と清がとひかへしますと、

『だつて、御覽なさい、あの雞冠がまるで炎の冠ぢやありませんか』と答へ

ました。

五三 姥百合山

ある夏のことでした。アイヌの村では早魃がついて、畠に作つてゐた薯も野菜も、みんな枯れてしまひました。ふだんお金の貯への少しもない村の人達は、他からお米を買つてくるといふ事も出来ません。そこでどの家でもみんな近所の野原や山へ行き、姥百合を探してその根を堀り、持つて歸つてお団子を造つてたべるばかりでありました。

その中にも困つたのはトレブといふ子供の家でした。トレブの父さんは去年の冬、熊を獲りに出かけたきり歸らないのです。その上母さんはこの春に妹が出来てから煩つてゐて、今床を離れることが出来ません。それで日々の生活はトレブが一人で働かなければなりません。

トレブは毎日朝早くから姥百合を採りに出かけました。初めの中は家中食べ足りるだけの塊根を採つて來ましたが、村中の人が手當り次第に採るものから、近くの野にある百合は直きに採り盡されました。

或る日の事でした、トレブは夕方おそくまで山を捜し廻つても何も採れず、へとへとにつかれて足を引摺りながら歸りますと、すぐ自分の行く先を百合の塊根を澤山に擔いで重さうに歸るものがあります。見るとそれはお隣家のチャブといふ爺さんです。トレブは思はず駈け寄つて、『をぢさん、澤山採つたのね

え、何處でそんなに採つたの。僕今日一日山を探して歩いたけど、一つも採れなかつたの』といひますと、チャブ爺さんは、

『さうだらうさ』といつて、かまつてくれようとはしません。

『をぢさん、ほんとに何の山へ行つたら、百合があるの。教へて下さいな』といひましても、『知らないよ』といひます。

『ぢやねえ、をぢさん、お氣の毒だけど、僕の家のお母さんが病氣で困つてゐるんだからねえ、僕何にも持たずにかへるとほんとうに困るんだから、母さんに食べさせるだけでも貸して貰へないかなア、僕明日は屹度採つて來てかへしますよ』とたのみました。處がチャブ爺さんは、それでも可哀さうだとも思ひませず、

『お前たちの事にかまつてゐてはたまらない、そんな事は知らないよ』といつ

てどうしても取合はず、さつさと自分の家へ歸つてゆくのでした。

トレブは全く途方に暮れました。その夜はお腹のすいたのと、心配になるのでまんじりともせずにかきました。

明けの朝トレブはまだ薄暗い中に起きて出て、また山へ百合を探しに出かけました、すると向うの道をチャブ爺さんが通ります。

『さうだ、あのをぢさんもまた採りに行くのだ、何處へ行くのだらう、悪いけど、そつと後を跟いて行つて見よう』とトレブは斯う思ひました。そこでチャブ爺さんの後から、見えがくれに跟いてゆきました。

チャブ爺さんは、トレブが後をつけてゐるとも知らず、草を分け芒をくぐつて一の山を超えまして、二の山も超えました、三の山も超えました。それから谷川を一つ涉つて四つ目の神の山へ登つて行きます。

トレブはそれを見ると吃驚いたしました。その神の山はむかしから神様のお住みになる山で、誰も登つてはならない、と云ひ傳へられてゐる、恐ろしい山であります、そこへチャブ爺さんが今登つて行きますから、トレブはびつくりして、谷川のこちらの岩陰に止まり、じいつと暫く見てゐました。

チャブ爺さんは神の山の道のない崖を草につかまりながら登つてゆきました。やがて高い崖の上までのぼつて、姿がかくれたと思ひますと、忽ち『さやつ！』といふ叫びが起り、つづいて、

『助けてくれえ、助けてくれえ……』と呼びながら爺さんが逃げて出ました。と見る中に、あんまりあわてた拍子に、崖の上から踏みはづして下の谿川までコロコロ轉がり落ち、積へどしんと腰を撲ちつけると、その場でウーンと氣絶してしまひました。

トレブは思はず駆け付ました、仆れてゐる爺さんをゆすぶりながら、
『しつかり、をちさん、しつかり』と氣をはげまして、水を汲んできてやつた
り、さすつたり、いろ／＼手當を加へました。

チャブ爺さんがやつと息を吹きかへしますと、トレブは自分の肩につかまら
せ、力のありつたけを出して引摺りながら連れてかへりました。

かへつて手當を加へましたので、やつと元氣が出て來ました。チャブ爺さん
は、トレブの手を握り、泣きながら、お詫びをしていふには、

『トレブ勘忍しておくれ、俺は悪かつた、ほんとうに慾張りだつた。昨夜お前
にあのやうに慾張な仕打をしたものだから、神様のお罰があつたのちや』

『をちさん、お罰つてどんなこと、山にはどんな恐しいものがゐたの？』
『そりやでツかい、でツかい、立つと一丈もあらうといふ熊に追つかけられたの

よ、思ひ出してもぞつとするわ』

『大きな熊がゐたの？ あの山に』

『さうぢやさうぢや、村では誰も登つたことのない神様のお山だ、あんな處へ登
つて百合なんか掘つたから罰があつたのちや。逃げるのが遅かつたら、あの大熊
につかまつて屹度八ツ裂きにさかれたことぢやらうよ』といふのでありました。
黙つてきいてゐたトレブは、

『それぢやをちさん、あの山に姥百合が澤山にあるの』

『そりやあるとも、今まで誰も登つたことのない山だもの』

『さうか、それぢや僕これから採りに行かう』と、もうトレブは飛び出さうと
します。チャブ爺さんは驚いて、

『お前、熊がゐるぞ、うつかり登つたら熊につかまるぞ』といひますと、

『大丈夫ですよ、僕は外の道から廻つて氣をつけて登ります、神の山は神様のいらつしやる山でせう、神様は私達が食べるものがなくて困つてゐるのを助けて下さるにきまつてゐます、早く行つて採つて來ますよ』といひながら、急いで駆け出しました。

トレブは一の山を越え、二の山を越え、三の山を越え、谷川を涉りますと、それから熊が出ないかと、用心をしいしい、今朝チャブ爺さんの登つたところは別の坂道を取つて、氣を付けて登りました。するとその途中熊はおろか、兎一匹出ません、その中にトレブは一つの岩を越えますと、忽ち眼の前に廣い原が開けましたが、その原には一面に白い姥百合の花が、お花畑のやうに咲き揃つてゐます。

トレブは見るとあわてて百合を引抜きました。するとその根からころころ大

きな塊根がころころ出て出ます、夢中になつて採る中に直きに一山の荷を造りました。トレブはそれを両手に抱へられるだけ澤山に抱へて、歸りかけました。その歸り道に、近さうなのでチャブ爺さんの登つた方へ出て見ようと思つた、すぐ向うの崖の上の芒の蔭に何か黒い物があるのです。トレブはギクツとしました、持つた百合をそつと下におき、草のかげから、そつと覗いて見ますと、それは動きはしないやうです、そこで若し熊だとしても眠つてゐるのか、死んでゐるのだ、とかう思つたトレブは足音をしのばせ、近づいて見ますと、忽ち、

『やアーい。』といつて笑ひました。

『なアんだ、熊だと思つたら木の古株だ。』

さういつてトレブは駆け出しますと、その古株の傍までゆき、足でボンと蹴

りました、するとその古株は忽ちボクリと根元が抜け、崖の下へコロコロコロ、やがて谷川の大きな岩にぶつかつて、粉微塵に碎けてしまひました。

トレブはそれを見てどんなに喜んだこととせう。急いで百合の根を抱へて家へかへりますと、母さんにわけを詳しく話しました。そして、

『母さん、神山には百合があんなに澤山にありますもの、村で採れなくて困つてゐる人達に知らせて、みんなて採つて来て食べることにしませう』といひますと、母さんも、

『さうださうだ、はやく村中の人達を呼んで来て知らせてお上げ』と賛成しましたので、トレブはすぐに村の人達を呼び集め、今日あつたことをすつかりお話をいたしました。

村の人達はトレブのお蔭でみな 神の山にのぼり、思ひ／＼に姥百合を採

りましたので、飢饉からすくはれました。慾深のチャブ爺さんもそれからすつかり善い人になつて、トレブが大きくなつたら、村の會長様に成つて貰はなければならぬといつてをりますとさ。

五四 七ツの鈴

桃の咲く頃となりました。村はづれの鍛冶屋では、源兵衛爺やが、一服して

ゐますと、店の障子に小さな笠の影がうつり、ほそい御詠歌がきこえはじめました。

「おう巡禮かえ、進ませうかな」

爺やは柱に懸けてある銭入から銅貨を取り出して、障子を明けました。見ると優しい少女ですから、爺やはしたしげに、

「御苦勞様、何國からござつたか」とたづねますと、

「はい、あの峠をこえてまわりました」と答へます。

「一人旅かえ、それとも親御と一緒に」

「いゝえ、辨天様のお供の旅でございます」

「なに？辨天様のお供だと？」爺やは不思議さうにたづねました。すると巡禮はにつこりとして、

「はい、私をお守護りくださるお方でございます」

「なるほどな、それはそれは……」と爺やはうなづきました。見るとこの巡禮は、杖を突いてゐますが、鈴は持つてゐません。

「お前さんは御詠歌をうたふのに、鉦も鈴も持つてゐないのかな」

「はい、國から持つて出ましたのは、お氣の毒な道連れの方に上げましてございます」

「それはいけねえ、鈴がなくちやあお巡禮らしくないぢやねえか、よし、わしがつよい鈴を供養して進ぜよう」といつて、爺やは店の棚の上から、妙な形の鈴を取り出し、埃を吹いて渡しました。

「これぢやよ、なか／＼好い音が出るぞ」

少女はもらつて振りますと、まことに美しい音色です。

『まことに結構な品を有難うございます』

とおし頂きました、爺やはうなづきながら申しました。

『それはな、この村の時の鐘の破片で造つたのぢや。時の鐘というとな、お前は知るまい、いや旅の衆の知つてゐる筈もないが、それはむかしから鎮めの鐘ともいうてな、まことにこの村の寶の尊い鐘だつた、この鐘が毎日鳴り響く間は村には争ひ事も起らなけりや、田圃に悪い蟲もつかなくなつた。處がお前去年の暮のあの大嵐の時によ、あの鐘つき堂から火事が起つてな、堂も鐘も丸焼けになつてしまつたのぢや、いやはや残念なことをしましたわい』

『まア、とんだ事でございますわねえ』と巡禮は眉をひそめました。

爺やは煙管を爐端で一つはたいて、

『だが焼けたのは爲様がない、爲様がないが、その毀れた鐘をも一度鑄直したら

又役に立ツたらうがなう、今の若い衆は年寄とは考へが違ふわい、なんの時の鐘のやうな昔ののこり物はこはれても惜しくはねえ、この頃は金物の値打が大層高いから城下の町で賣つてしまへ」といふので、たうとう馬につけて、町へはこんでしまつた、いやはや惜しいことをしましたわい』

『それは惜しいことをなさいましたのねえ』

『それでな、わしはあんまり残りおしう思つたので、その時村の衆に頼んでな、あの鐘の小さな破片を一つ貰つてな、それで造つたのがこの鈴ぢや、丁度記念に七つだけつくつたがな、造つて見ると、どの音もどの音も、わしにアどうも氣に喰はねえわい』

『左様でございますか』

『ハハハ。いや出ねえのが當り前ぢや、わしのやうな鍛冶屋の技倆ではなう、そ

こでそんな鈴を持つてゐるのがいやになつたので、村の小さな衆が見つかり次第わたしてゐたのぢやが、つい今まで一番大きいのがたつた一つ残つてゐたのぢや、丁度よかつた、お前には大事な道具ぢやものな……これを進ませませう」

「左様でございますか、それは有難うございます、大切にして持ちますでございます」

「おうおう、これから村へ入らつしやるか、村ではそのやうな鈴を持つた子供達に遇へることぢやらう」

「さやうでございますか、どうも有難うございました」

巡禮の娘は叮嚀にお辭儀をして、貰つた鈴を打ち振りながら、いそいそと村の方へと向ひました。それを見おくつた爺やは、

「やれ〜氣がかりなおもちやはこれですつかりなくなつた、村の時の鐘

は眼さへつぶればいつでもわしの耳に鳴つてくれる、その方が好い、その方が好い、つまらないおもちやなんぞはかならず造らないことぢや」といひました。

二

巡禮の少女はなみ子と申しました。なみ子は村の入口に架つた橋を渡りかけますと、下の流れをきれいな花が幾つも幾つも浮んで流れてゐます。

椿の花、桃の花、櫻草の花、野に咲き山に咲く花の数はのこらず浮んで流れます。その美しいこと、なみ子はいつまでもいつまでも橋の上にな、ずんで眺めました。

やがて川下の草原で、騒がしい聲がきこえました。見るとそこには小山羊が大勢、川縁に集まつて、泣いたり騒いだりしてゐますから、なみ子は溺れたの

でもあるのか、とあやしみなながら駆けつけて、訊ねますと、その小山羊の中のいたづらさうなのが、

『さうぢやないの、あれ、あそこに泣いてをる玉ちゃんが、こんな僕のつけてゐるやうな鈴をつけてゐたのを、いま川へおつことしたんです』といひました。すると外の一匹が、

『玉ちゃんが、流れて来た椿の花を拾はうといふんで、川の中へ飛び込んだはずみに、あの鈴をおつことしたんです……』といひます。するとその落したといふ玉ちゃん小山羊は泣き泣き立ち上り、

『僕金介さんから叱られるんだもの、……これから源兵衛爺さんとこへいつてもう一つ貰つて来ようかな』
なみ子は可哀さうに思ひました。

『それは困つたのねえ、ぢやア私のこんな鈴だつたの？これなら、わたし今向うの鍛冶屋のお爺さんに一つつきり持つていらしたのを頂いて来たんですから、もう、お前さんがいらしつても無いことよ』

『もうないの？』

『さうなの、だから、わたしのこの鈴を貸して上げてもいいわ』

『でも唯貸して貰ふだけぢやいけないの』といひました、その中にひとりかなみ子をよく見て、

『これは違つてらア、玉ちゃんの失くしたのはこんな大きなぢやなかつたもの』といひます。

すると他の一匹が、

『だつてあんなにおつしやるもの、沼から出て来るまでこの方のを貸して貰は

うちやないか、そしてその間に誰かこの方を案内して沼の金介さんの處へいつて、失くした鈴を捜して貰つたらいい、ちやないか』といひました。みんなは、『それがいい、それがいい。』といひました、そこでなみ子は玉ちゃん小山羊の頸に自分の鈴を結へてやり、

『さアかうして貸して上げますからね。その金介さんの處へ、誰方が連れて行つて下さいな』といひますと、

同じ鈴をつけてゐるお黒といふ小山羊が、

『ええ、僕がいきます』といつて大威張で先に立ちました。

三

なみ子はお黒坊と一緒に川添ひ道を沼の方へ行きました。楊の樹の四五本生

えたところで流がよどみ、花がたくさんに浮んでゐましたが、その岸に大きな鴨が一羽、休んでゐました、その鴨の長い頸には光つた鈴がついてゐます、それを見たお黒はいそいで、傍へゆき、

『鴨のをばさん、その鈴は何處で拾つたの？』と尋ねました。鴨のばアやはあわてて立ち上り、水の上へ飛び出して、

『がツがツ。あゝびつくりした、お黒坊に取られちやたいへんだよ、これは今朝程鳩の豆子と一緒に金介さんから貰つたんちやないか』
といひました。

なみ子はそれをきくと、

『あらそれちや黒ちゃん、この方の鈴は玉ちゃんのちやないわ、をばさん、他にもう一つそのやうな鈴がこの邊まで流れて來はしませんでしたか』と尋ねま

すと、鴨のばアやは、

『流れて？そんなものは流れては来ませんよ。でも川底ではどうでせう、ちよいと石龜の勘ぢいやさんに聞いて見ませうか』

『ええ、どうかお願いいたしますわ』と申しますと、鴨はアやはがぼりと水中へ潜り込みました。なみ子とお黒坊はしばらく待つてゐましたが、間もなく鴨のばアやは、石龜の勘爺やを連れてぶくりと浮びました。

『さアこのおやぢさんにきいて御覽』といひました。そこでお黒坊はその石龜に鈴のありかを尋ねますと、勘爺やは『なるほど』とうなづきながら答へました。

『實はなアお黒坊、さき程うちの子供達がおもてからヘンなコツブを拾つて来たのぢや、それがお前、コツブの底の處に、小さな子供がついてゐるから、わ

しは考へたのぢや、これは子供持コツブとでもいふのぢやらう、これで以て好きなお酒が一ぱい飲みたいものぢやなと、さうするとな、一番上の龜の子がいふのには、『今しがた向うの森のかげの淺瀬で甲良を干してをると、そこへ大きな猿公が、眞赤な顔で出て来て、沼の水を飲みますから訊ねますと、今日は辨天様のお祭りで、猿酒が出来上つたから、呑んだのだ、お前達にも御馳走をしようといひました』つて斯う申すのぢや、するとお前、他の子供がきいて大さわざぢや、早く行つて猿の子供達から貰つて呑んで来よう、といふのでたうとうみんな出て出かけて行つたのぢやがな、はは、今鴨はアさんからきけば、あれは子供持のコツブぢやなうて、時の鐘の子供ぢやさうな、いやはや水の底にゐるもんでつい飛んだ間違ひぢや』

かう話しましたので、お黒坊はじれつたさうに、

『ちやそのコツブ：ちやないんだ、鈴を以て龜の子達が今辨天沼の森までいつてゐるんだねえ』と問ひかへしますと、石龜の爺やは、

『さうだよ、今、あの森かげまでいつてゐるのちや』といひます、お黒坊はきいて、

『猿に取られたら困るなア』と途方に暮れますと、鴨のばアやが傍から、

『い、よ、鈴のありが知れたら、い、ちやないか、わたしア引きうけて貰つて来て上げるよ』と申します。

すると、さき程からだまつて聽いてゐた巡禮のなみ子は、此時龜の爺やに、

『今日は辨天様のお祭日だといひましたのねえ』と尋ねました。

『さうですよ、お前さん、むかしは今日のお祭には村ではたいそうなお祝ひが出来たものちやがな、今は辨天様がお留守ちやによつてお祭のしやうもねえつ

ていふもんでさア、なア鴨ばアさん』

『がツがツ、ほんとになア、辨天様が御座らつしやりませず、時の鐘が鳴らなくなるし、その上かうして、荒神山から、しつきりなしに、花が流れて来るし、なんだか氣がおちおちいたしませぬわい』

といひます時、すぐ上の楊の枝で可愛い鈴が鳴りました。

みんなその方を見あげますと、鳩の豆子が一羽舞ひ下りて来て、

『鴨のをばさん、はやく歸つて頂戴よ、今森では大へんなの』

『大へんだつて？』

『ええ、猿の子供達が喧嘩をはじめたのよ、それも金介さんがお留守なものですから、しやうがないんですもの』

『それはいけない、ちやはやく行きませう、お前さんはすぐ金介さんをさがし

ていらつしやい』

『はい、ではすぐいらしつてねえ』と小鳩の豆子は舞ひ上りました。その後から鴨のばあやも、『どれわたしも見て来ませう』といつてあわてて舞ひ上りますと、石龜の爺やは仰山さうな顔をしてブクブクと沈みました。

なみ子はお黒坊を見かへつて、

『わたしもその辨天沼まで行つて見ますわ』

『あなたいらつしやるの、猿公は随分無茶だからね』

『ええ氣をつけて行きませうよ』

『ちや僕も行かうや』と、ふたりはすぐに沼の方へといそぎました。

四

ふたりは里川が辨天沼に流れ込んでゐる處までゆきよしました。大きな沼の中島のお宮のある森では、小猿の鳴き騒ぐ聲が手に取るやうにきこえます。丁度、そこへ豆子のしらせをうけた宮の番の金介が、小山羊の玉坊に乗つて駆けて来ました。其處につないであつた小舟へ飛び乗りますと、先ほどの鴨のばあやが駆けて来て、その小舟を綱で曳かうといたします。

なみ子はその時いそいで止めて、

『若し、私も島へ渡して下さらない』といひますと、金介はふりかへつて見

『あゝこの人か、玉坊に鈴を貸して呉れたのは…』

『ええ、わたしでございますわ。あなたはあの辨天沼の宮の番をなさつていらつしやる方でせう？』

『さうなの』

『ぢやわたしに辨天様へおまわりをさせて下さいませんか』

『よし、はやくお乗りなさい』

『どうも有難う』

なみ子は小舟に乗り移りました。金介は櫓を取り上げると、

『さあ鴨ばアさん、しつかりたのむぜ』といひました。鴨ばアやは、

『がアがア、大丈夫でございますよ』とグイグイ綱を咬へて曳きながら島に向つて泳ぎました。

小山羊のお玉坊とお黒坊とはその後について泳ぎました。

間もなく小舟は島につきました。見ると森かげで大勢の小猿が、きやツきやツといがみ合ひをしてゐるのです。金介はその中へとびこんで、拳をふりかざし、

『こらこら、喧嘩をするんぢやない』と叱りつけました。すると花坊といふ大きい方の小猿が、

『だつてこの猿どもはいけないんです。僕が折角石龜の子供から貰つたコツブを、僕のだ、僕のだつて取らうとするんです』と訴へます。また柄坊といふ猿のいふのには、

『いゝえ、そりや花坊のいふのは嘘です、僕達がむかうの原で、烏の加平治に胡桃と取かへこをして貰つた鈴なんです。花坊の馬鹿！こんなものがコツブになるかえ』といひます。

それをきいて金介は、

『いつたい花坊のいふのはコツブだ、柄坊のいふのは鈴だらう、それならめいのいに品物が違ふぢやないか、どれ僕にその品を見せろよ』といながら、金介

は、花坊がしつかりつかんでをるのを取つて見ると、全く鈴に相違ありませんから、すぐぶちさげてチリンチリンとふつて見せ、

『そらね、花坊、これはコツブぢやないよ、鈴なんだ。僕も、源兵衛爺さんに三つ貰つて、一つはむくの頸につけてやり、一つは牧場の小山羊共につけてやつたんだ、あとの一つは辨天様のお堂の軒から吊しておいたのを、誰か取つて行つたんだがな』

『だつて、僕、それは石龜の子供から貰つたんだもの』と赤公は言ひ張ります。なみ子はその時傍から、

『石龜の子供達から貰つたといふなら、屹度玉ちやんのおつことしたものでせう。それは先程鴨ばアさんに捜して貰つたんだもの』

『さうだらう、僕もこの大きさを見て屹度さうだと思つたんだ』と金介が申し

ましたが、赤坊も柄坊も、なかなかそれを受付けません。いつまでもうばひあふのですから、金介はいひました。

『こんな風ではいつまでたつても喧嘩がたえないのでせう。ですから、一層のこと、鈴はみんな鳥の子供たちの持ち物にして、運動會でもしようぢやないか』

『それが宜しうございますわ』となみ子も賛成をいたしました。そこで金介について来た小山羊のお玉坊も、鴨ばアやも、小鳩の豆子もめいめい鈴を出して、

『金介さん、これも出します』

『わたしのもみんなのお仲間のにして下さい』と申します。そこへ、森の上から鳥の加平治がとんで来て、金介の前に止まりますと、泥だらけになつた鈴を一つさし出して、

『金介さん、どうも濟みません』と申します。金介はその鈴を拾ひ取ると、

「なアんだ、これは僕がお堂の軒に吊しといたのぢやないか」

「左様でございます、あんまりよく鳴りますから、ついだまつて持つてかへらうとしますと、途中でりんく鳴つて爲様がありません。これはかくしといても直にわかる、と思ひましたから、原つばにゐた朽坊にやりましたが……」

「ぢやそれ、僕んだねえ」と朽坊は横から取らうといたします。加平治はそれをたしなめて、

「だまつておいで……それで金介さま、この朽坊にやると、直に草むらの中でなくしてしまつたのです」

「さうかえ、それで以て朽坊は花坊の持つてゐるのを取らうといふのはいけな
いよ。拳骨を喰はせるぞ」とにらみつけますと。朽坊は頭をかへて、

「御免下さい、御免下さい」と後の方へ逃込みます。みんなはどつと笑ひました。

加平治は羽根をつくらひ、改めて金介にお辭儀をしまして、

「どうか朽坊もゆるしてやつて下さい、失くした鈴はこゝに捜し出して來ましたから、お返し申します、全くこのおやちが悪うございました」と詫入るのでした。

金介は鈴を受けとりますと。

「宜しい、おやちもこれから氣を付けるんだ、今度だけは免しておかう。……さうするとこれで幾つ鈴が集まつたらう」と金介は一つ一つならべて見て、小鳩の豆子の一つ、お花坊猿ので二つ、鴨ばアやので三つ、小山羊のお黒坊ので四つ、それから大きくなつて、加平治の持つて來たので五つ、それと花坊がつけてゐるなみ子の大きな鈴を加へると六つになります。金介は、

「さうだむくが村からかへつたらみんなて七つになるね。さうすると、源兵衛

爺さんが造つたのがみんな集まつたんだ』

『まアさうですか、それははうございませう』となみ子もよろこんで、

『それをこの森の子供たちのみんなのお仲間の品としたらいいでせう』といひますと、

『うむ、これで一つ面白いことをしよう、みんなおいで、これから原へいつて運動會をはじめようぢやないか』といひました。

それをきくと子供達は大騒ぎをしてよろこびました。

『さアさア、いきませう』

『はやくやりませう』

『僕は第一等であの一番大きな鈴を貰ふんだぜ』などいひ合ひながら、金介をとりまき、ぞろぞろと原の方へと行きましました。

五

なみ子はひとり後に居残つて、辨天様のお宮の前にゆき、そこにすわつておまわりをいたしました。

すると不意に沼の向うで、犬が吠えます、ふりむいて見ますと、こちらへ枝角のある大鹿が一匹ぶざぶざ沼をわたつて逃げて来るのでした。その上後から、村の衆が大勢棒をもつたり、鍬をもつたりして追つかけて来るのでありました。なみ子はそれを見ると、珠數をまいた手をあげていひました。

『鹿さん、大丈夫、私がかばつてあげますわ』

それをきいた鹿は、島へかけのぼり、顛へながら傍へ来ました。

『鹿さん、大丈夫よ、まつていらつしやい、私がかばつてあげますわ』

といふうちに、追つて来た村の衆の船がぞろぞろ島に近づきました。するとなみ子は手をあげて止めながらいひました。

『御免なさい、鹿さんをいぢめるのは御免なさい』

その落ちついた巡順なみ子の容子、その上げた手頭には、珠数をまいてゐますから、村の人達は鹿を逐ふのを躊躇いたしました。そして先に立つ強さうな親爺が、

『お前は誰だえ』とたづねました。

『私は巡禮のなみ子でございます』

『どうしてその鹿をかばうのか』

『だつてをぢさん、可哀さうぢやありませんか。こんな立派な鹿さんは、もうこの邊の山には滅多に棲まないのでございますよ』

『そんなことはどうでもいい』

『はやく出せ』

『殺してやらう』

『角を取るんだ』

『まア驚いた、こんな鹿の角や皮が欲しければ、町へ出たらいくらでも買へるわ。この鹿一匹を、さう大勢してかゝつて殺したつてどうなるものですか、罪もないものです、うつちやつてお置きなさいよ。村の馬や犬と同じやうに、可愛がつておやりなさいよ』といひますと、一番先に立つ爺が合點して、

『成程さうだ』といひました。するとみんな、

『うまい考へだ』

『このまゝこの島に飼つておかう』

『さんせい、さんせい』などと申しました。

そこで騒ぎがをさまりますと、みんなちきに引揚げて行きました。

なみ子は村の人たちがかへつてから、牡鹿をいたはつて、

『どこから来たの』と尋ねますと、牡鹿は枝角をふりながら語りました。

『私は向うの荒神山からまゐりました者でございます。昔から私の山の大き岩の中において遊ばす荒神様は、辨天沼の辨天様とお約束がございますので、それは村の時の鐘が八萬度鳴りましたら、荒神様がこの島へ遊びにおいてになることに定つてゐたのでございます。處が去年の暮からふつつり時の鐘が鳴らなくなりしました』

『あの時の鐘ですか。それは火事で焼け落ちたんですつて……』

『左様でございます。その上に、毎度辨天様からよくお届けになりましたお便

りもこの頃びつたり止まりましたので、荒神様は大層御心配あそばし、毎日毎夜谷川にことづけて、櫻草だの、山椿だの、またいろんな野山の花のお便りを遊ばしますが、辨天様には今に一度も御返事がありません』

『まア、それはお氣の毒様でございますわねえ』

『それで荒神様はもう岩をぶりぶりおやすぶりなさる位お腹立ちで、辨天様がとても便りをよこさなければ、大暴れにあばれて、岩を打ち砕き、無理矢理にもこの辨天沼まで出かけて見よう、とかう仰有るのでございます』

『まアそれはたいへんねえ』

『處があなた、荒神様が山をおいでになつたら、たいへんでございますよ。この川に大洪水の出るは申すに及ばず、若しかいたしますと、この谿間の村が、すつかり泥海となつてしまふてございませう。私はそれが心配で心配で、山に

じつとしてをることが出来ません。それで一度辨天様まで御様子伺はうと思ひまして、今日此處までまわつたのでございます』

『まアさうでしたか、それを村の人達がみんな追つかけるなんて、ひどいわねえ。ほんとに御苦勞様、今この辨天様のお守りをなさる金介さんがいらつしやいますから、ゆつくり御相談いたしませう』といたはるのでありました。

六

鹿の話をなみ子がきいてゐますと、そこへひくの案内に金介が猿や鳥や山羊や鴨や鳩を、そろそろと連れて歸つて來ました。見ると兩手に七ツの鈴を持つてゐましたが、なみ子の傍に牡鹿が立つてゐるのを見ますと、

『やアこれだ、これだ、お前さんの枝角にこの鈴を結へて振つたらよく鳴らう

ぜ』といひます。

『まア、どうしてそんなことをおつしやるの』となみ子がたづねますと、金介は、

『あそこで運動會をしようにも、みんなでんで一つ一つ鈴をつけたといふので、逆もをさまりさうもないんだ、ですから、一層のことみんなからこの鈴を取り上げて、こつちに預かることにしたのだ。するとそこへひくがやつて來てね、今大きな鹿が飛んで來たと知らせたから、どうしたんだらうと思つて歸つて來たんだが、この牡鹿の角なら丁度いゝ、この鈴を角の枝に一つづゝ吊して鳴らさせやうぢやないか』

『なるほどね、それもようございますわ。ぢや牡鹿さん、今金介さんのおつしやる通り、角に鈴を吊して上げませうか』

『へッへッ、その鈴といふのはまたどういふ品でございます』
『これはね、あの時の鐘の破片で鍛冶屋のをちさんがお造りになつたんですわ』
『あの時の鐘の破片で……それは有難うございます、早速吊して下さいませ』と
いつて角を差し出しました。金介は、
『ようし、それちやつるしてあげるよ』と右の角に三つを、またなみ子も手傳
つて左の角に四つを吊しました。
『さアすつかりつきましたわ、をちさん、ちよいとお頭を振つて御覽』といは
れて牡鹿は、
『へいへい、かやうにでございますか』と鈴のついた角を右に左にうち振りま
した。するとその度チリンカランと賑かに鳴りました。鳥の子供はみんな牡鹿
を取り捲いてやんやとよろこびます。牡鹿もつひその音色にうかれ出して、拍

子面白く角を打ち振りながら歩き出しますと、大勢のこどもたちはみんなその
後から踊りながらついて、又も原の方へぞろぞろゆきました。
その後でなみ子は金介に、今牡鹿の来た用向きを詳しくつげました。
金介はこの頃川に花の流れて来るのは、荒神様の御催促のお便りだと聞きま
すと、悲しさうな顔をして、
『いや全くさうだと思つた、だつて今はもうこのお宮には辨天様がおいでにな
らないのだもの、荒神様がどんなにおつしやつたつて爲様がないんだ』と申し
ました。
するとなみ子は眼をみはりました。
『なんですつて？ 辨天様がこのお宮にはおいで遊ばしませんのですつて、それ
ちや何處にお移りになりましたの』

「それがわからないのさ、去年の暮、時の鐘が焼けおちたあの晩の騒ぎにさ、どんな悪者かしらないけど、辨天様の寶石の御神體をどつかへお連れ出し申してしまつたんだ」

「えッ、寶石の御神體？それはどんな……どんな」といひながらなみ子はあわてて懐から錦に包んだお守護袋を取り出し、押し頂くとその口を開いて、金介にのぞかせました。

「これでせう、これでせう、このお方がさうでせう」

「オッ」と金介は一目見るとひつたくり、

「これだ、このお方をお前さんは何處からお供をしたのか」と問ひたゞします。なみ子もほつとして、幾度かおしいたゞき、

「これはねえ、もうこれで三月も前のことでございますわ、北の國の雪の深い

峠みちで、行き倒れになつてゐた旅の人から、預けられたのでしたかね、何處にお祀りしてあつたものか、そんなこともなんにも存じないものですから——唯私のお守護として大切にお供して來たのでございますわ」

「さうかなア、それではお前さんが此處までそのお供をして來たといふは、別にこの辨天様のお宮があつたから、と知つてではなかつたのだねえ」

「ちつとも存じませんのよ、それに今日はお祭日だといふのでせう。ほんとにこれも辨天様のお導き遊ばしたのかも知れせんわ」

「さうだねえ」互に深く驚きあふのでありました。

七

この時空がにわか曇つて來ました、すると金介となみ子の居る處へ、今ま

で子供たちと一しよになつて騒いでゐた牡鹿が、眼色をかへて駆けて來ました。
『あれ御覽なさい、あの黒い雲を！』といはれて二人は見あげると、荒神山の
上あたりに恐ろしげな雲がむくむくと涌いてゐます、と思ふうちに、さつと吹
き下した冷たい冷たい山おろし、地にひやく山鳴、小さな子供達がふるへ上つ
て逃げまどひますうちに、もうその雲が空一面にひろがつて、ぼつりぼつり
と大粒の雨が降り出します。なみ子はその模様をじつと見てゐます。金介は唯
おどおどとしてゐます。

その間も牡鹿はあわてさわいで、

『あれ御覽なさい、荒神様が、たうとう山からおでましになるのをごさいます、
愚圖愚圖してをると大洪水になります、なみ子さん、私アかへります、はやく
山へかへつて見なければなりません』といつて、いまにも沼をこして、山の方へ

と駆け出さうといたします。

するとなみ子は急いで牡鹿の角につかまりました。

『鹿のをちさん、私が辨天様のお供を申し上げるから、私も連れていつて頂戴
な』

『えッ辨天様のお供ですつて？』

『さうです、御覽、私はちやアんとこの胸に辨天様をお祀りしてゐることよ』

『それはそれは御勿體ない、……それぢややく私にお乗り遊ばせ』

『乗つてもいゝこと』

『大丈夫でございますよ、そら、もうこんなに荒れて來ましたぞ』

なみ子は急いで牡鹿の背に乗りました。牡鹿は鈴のついた大きな枝角を振り
ながら、沼を一息に泳ぎ切つて、山の方へと駆け出しました。

小山羊や小猿や鴨や犬達がみんな後から騒ぎながらついて行きました。

嵐はいよいよ烈しくなりました。その嵐の中を、跳ぶことの速い鹿は、一散に山の方へかけてゆきました。それは小山羊や小猿がおひつくことの出来ない位にはやく、忽ち山の陰にかくれて見えなくなつてしまひました。

この牡鹿に乗つたなみ子の姿が見えなくなると、間もなく、恐ろしい山鳴りもきこえなくなりました。あらしも風ぎました、そして谿川の流は濁らなくなりました。

島の子供たちは牡鹿におひつげず、泣き騒いでかへつて來ましたが、金介は唯もうだまつて、涙をうかべて山の方を見つめるばかりでした。

なみ子の姿はそれつきり見られませんでした。

鍛冶屋の源兵衛爺やはじめ村の衆は、たいそうそれを惜しみましたが、なみ子はそれつきり山からかへつては來ませんでした。

ある日のこと、村の衆は金介を先に立てて、なみ子を山へ捜しにのぼりました。あの荒神様のおいでになるといふ巖山のあたりまで近づきましたが、忽ち一面に桃色の雲が涌いて、どうしてもその巖山に登ることが出来ませんでした。しかしその時に、村の衆めいめいの耳には、きれいな七つの鈴の音色がどこからともなく鳴りひびいてきこえたと申します。

五五 あわて木兎

登場者

木の子 大勢 なるべく六七歳までの幼児

親木の子 十歳前後の少年

なつ子 七歳位の少女でありたし

木兎爺や 少年か青年

小兎 十四五歳までの少年

鳥 大勢 少女の合唱隊

森の奥の場面

紫色か紫紺色の一色の幕の前に、均齊的な森（なるべく木製玩具を擴大したる形でありたし）を装置し、その中央の切株に親木の子腰をかけ居る。若し電氣装置あればおぼろげなる森かけ、唯親木の子の冠れる紅色に白斑の帽子のみくつきりと映えて見ゆるところで幕あく。

前奏曲

洋琴か或は箏にても宜し。最も閑寂なる調べの、次第に拍子速まり、階調賑かになる中に舞臺の上下手兩方より、同じく紅茸帽子をかぶれる幼児達二列になつて登場、二拍子の行進曲にて森を巡りつ、ダンスを始める、すると今迄切株にしやがみ眠り居たる親木の子、ヒョコ／＼起き出し、木の子達の踊を見廻し、最初は欠伸などしてゐる中にいつか自分も浮れ出し、切株に立ち上つてタクトを取りながら躍る。木の子踊次第に速くなり、果はスキップとなりたる時、不意に森の奥にて、

ホーツホロツ

と太き梟ふくろうの啼なく音聞きこえる。木の子達こたちその音を聴きくと、夢より醒さめし如ごとくに驚おどろき列らを亂みだし、蜘蛛の子の散ちるが如ごとくに、八方へ逃にげ匿かくる。

唯親木の子のみ、元の切株きりくにもとの如ごとくしやがみて、膝ひざに顔を伏ふせ居ゐる。

たゞ間奏かんそうかすかに残のこるのみ。

やがて、ヴァイオリンの慄おそえをおびたる伴奏ばんそうにて、

なつ子下手こしりてより、手籠てごを抱かかへ、あたりを見廻みまわしながら、かなしさうに謠うたつて登場とうじやう。

獨唱どくちやうへお母かあさまア

お母かあさまア

わたしの母かあさまどうこよ

どうこよら

どうこよ どうこよ

どうこよら

なつ子『私わたしほんとに困こまつた。向むかうて母かあさまと菌キノコを採とつてゐると、兎うさぎちゃんが飛とび

出したんでせう。私わたし欲ほしくなつて追おっかけたんだわ。すると、その兎うさぎちゃんがピョンピョン逃にげては私わたしを待まつてゐるんですもの。追おつかけ追おつかけしてとうとうこんな處ところへ來きてしまつたわ……。お、暗くい！ぞつとした、わたし早くお母かあ様の處ところへ行ゆきたいわ』

獨唱どくちやうへお母かあさまア

お母かあさまア

わたしの母かあさまどうこよら

どうこよら

どうこよ どうこよ

どうこよら

此歌このうたの前に、上手うま森もりの蔭かげより大おほきな木兎うさぎの爺おぢや現まはれる。しかし暗くいといつてもまだ眞晝まひるで

あるから、木兎の眼が見えぬ。手さぐりに歩きながら、

木兎爺『これこれそこへうたつて来た子供さん』

迷ひ子の少女なつ子ぎよつとして佇み、木兎の姿を見ると願へて、

なつ子『あ、あのわたしでございませうか』

木兎爺『さうぢやさうぢや、お前さんぢや、此方へおいで』

なつ子『あ、あのをぢさん、私は道を迷つたんでございませうわ。私の母さまと、

森かげへ木の子を探りに来ましたのに、つい森の中へ兎ちやんと一しよに

入り込んだものですから……』

木兎爺『それは何處の森かげぢや』

なつ子『それは向うの』

と下手をさし、小首をかしげて。

木兎爺『向うの』とこたへると、なつ子また考へて。

なつ子『いゝえ、あつちの』と上手をさし『アノこつちでもなかつたしら』

と一度前を指して又手を下げて、

なつ子『私、もうわからないんですもの。はやく母さまの處へ出して頂戴な』

と顔に手を當て泣崩れる。

木兎爺『いやいやそんなに泣くものぢやない、をぢさんの家へおいで、直に母さんの處へ連れて行つて上げるからの。さ、さ、此方へおいで、をぢさんの家には、おいしい胡桃や、山葡萄や、栗や、蜜柑や、どつさりあるからみんなお前に上げるぞえ』

なつ子『をぢさんほんとう？』

とにこりしたがまた母の事を思ひうかべて、『だつてをぢさん。家の母さまがまつてゐらつしやるもの。私早く歸りますわ』

木兎爺『よしよし、直きに歸して進ぜるぞ。ささ、此方へおいで』

と森の奥へ連れこむ。奥でなつ子又母さまの歌をうたふ。今まで後でじつと考へ込んできいてゐた木の子がすつくと立ち上がると、深く合點して、

木の子『いや、これはたいへんだ、あのいち悪の木兎爺やが森の王様になりたいために、人の子供を捕へたぞ。さアこれからは、森の仲間がどんなにいちめられるだらう。困つたなア』

此時合唱起る。

合唱『こ、まておいで あまざけ進ませせう、

こ、まておいで あまざけ進ませせう。

迷ひ子の迷ひ子のなつ子さん

こオこは何處の細道ぢや

こオこは森の迷ひ路

ゆきはよいよい かへりはこはい。

かへる道には木兎さんが出ます』

再び「こ、まておいであまざけ進ませせう」を合唱隊が繰り返すのをきつかけに、その調子に合せて、踊りながら小兎下手より登場す。

手にふりかざす小枝で拍子をとリ、舞臺の上手までまはると、ヒヨイと立ち止まり、

小兎『なつ子さんは何處へいつたんだらう。たしか、先程此邊まで来た筈だがなア』

とあちこち見廻すと、その時まで黙つてじつと眼をつぶつて立つてゐた親木の子が不意に

木の子『エツヘン』

と大きくいふ。小兎吃驚してビヨンととび上がり、小枝をとリ落し、振向いて、

小兎『だ、だれかと思つたら木の子さんか』

木の子『左様でござる』

小兎『あゝ木の子さん、いましがた此處へなつ子さんといふ人間の可愛い子供が来なかつたの』

木の子『来たとも来たとも』

小兎『さう、来たの？て何處へいつたの』

木の子『森の奥の……』

小兎『森の奥の？』

木の子『洞の城へ……』

小兎『洞の城？』

木の子『さうぢや、あの木兎の爺やが豫てから望みの人間の子供をうまく捕虜にして、この森の大王様の位にのぼらうといふのぢや』

小兎『そ、それはたいへんなことになつたなア、さうでなくても、あの木兎は

夜になると森の中を荒し廻り、手あたり次第に私達の仲間を捕つてたべる
亂暴者だが、あれが若し王様の位にいたら、どんなにみんなが困ること
だらう』

木の子『まつたくだ』

小兎『ウン、僕達はどうかあつてもなつ子さんを救ひ出さなければならぬ』

木の子『まつたくさうだとも』

小兎『さて困つたなア』

と小兎腕ぐみをして考へると、木の子も腕ぐみをする、この時遠くから烏の歌が聞える。

合唱『カオカオカオカオ

烏の歌に森の日は暮れる

カオカオカオカオ

鳥の歌に森の日は暮れる

きくと小兎は手を拍つて、

小兎『うまいことがある』

木の子『どうした』

小兎『木兎のお爺は晝間は目がきかぬだらう』

木の子『さうだよ、先刻もなつちやんを手さぐりてつかまへてゐたもの』

小兎『さうだらう、だから鳥のお友達に日暮の歌をうたつて貰ふのだ』

木の子『ほう、木兎のお爺が日が暮れたと思つてのそのそ出るのか』

小兎『さうだ、そこへ僕が月姫様から頂いたあの大鏡を持つて来て、日向て照

り返しを喰はせるのだ』

木の子『ほう、木兎の顔へ照り返しを？』

小兎『うまい考へだらう？』

木の子『ははは、そりや滅法面白い考へぢや』

小兎『ぢや留守を頼むぜ』

木の子『心得た』

小兎下手へ駆け込む。

合唱『つとめをへて いまぞかへる

わがはらからを 神まもりませ

ゆふやけこやけ うるはしき空

しづかにくれゆく

しづかにくれゆく

此時奥に木兎爺のうれしげな聲、

木兎爺『お、はや日が暮れるのぢや』

なつ子『あらもう日が暮れますの』

木兎爺『さうぢや、今の歌は夕の鳥の歌ぢや、ホホ、いよいよよろこびの夜が来るのぢや』

なつ子『夜はこはいわ』

木兎爺『いやこはくはない、俺がこの森の大王の位に即く芽出度い夜が来たのぢや。どれ森に出て仲間を呼び寄せ、お祭の支度をさせよう。さアなつ子、そなたもこらへ出るのぢや』

木兎、なつ子の手を引き舞臺にあらはれる、なつ子まだあたりの明るいのによろこび、下手の木の間を指して、

なつ子『あらまだあんなに明るいわ』

木兎爺『い、や、あれは夕焼の色ぢや』

お爺眼をクシヤクさせながら、

なつ子また上手の空をさして、

なつ子『でもあそこもあんなに明るいわ』

お爺眼をこすりながら、

木兎爺『い、や、あれも夕の雲ぢや、ささ、お前もはやく夜の曲をおうたひ、はやくおうたひ、うたへば直きに夜が来るのぢや』

となつ子にせまる、なつ子論はうとしてモジクする。

此時切株にしやがんでゐる木の子、後よりそつとなつ子の袖をひき『うたふまい、うたふまい』と手を振つて見せる。

木兎爺ぢれて、

木兎爺『なつ子早く謡はぬか』

なつ子『だつて私知りませんわ』
木兎爺『好きな歌をうたへ、好きな歌を…』

なつ子うなづき、調子軽く、

獨唱へあがる

あがる

お日様あがる

ひがしの空に

きいらきら…

木兎爺いよく驚き

木兎爺『これこれ、その歌は困る。尙更まぶしくなるのちや、おまぶしい、おまぶしい』

と顔に手を押しあて逃げまどふ。

此時合唱起り

合唱へアツハハ

アツハハ

木兎の爺さんをかしいな

畫間の森を

のうそのそ

(複唱)

うたひながら鳥の少女隊ぞろ／＼上手、下手兩方より登場し、手をつなぎ輪をつくり、木兎爺を圍みながらうたひまはる。

それをきいて木兎爺や眼をまろくし、鳥達を追拂はうとする、鳥達いよく面白がつてうたひながら、木兎のぐるりなとびまはる。此時小兎大きな鏡を匿し持ちながら駈け出して、程よい處にて木兎の顔へばつと照りかへしをあてる。木兎爺や眼を眩まし仰天して苦しむ。

小兎大威張り。

木兎『木兎お爺まわつたか。なつ子さんをだましてとりこにして、森の大王様だなどと、我儘をすると、みんなて森から追出すぞ』

木兎爺や顔を地面にふせて、

木兎爺『どうぞ御免し下されませ』

この時兎なつ子の手を取り、

小兎『さアさアなつ子さんか。お母さまのお家へお帰りなさい。みんなてお見送りいたしますよ』

なつ子うれしそうにとびまはりながら、

なつ子『私かへれるの、皆さん有難う。鳥さんも、兎ちゃんも、木の子さんも、みなさんほんとうに有難うよ』

といそ／＼とお辭儀してまはる。
木の子も鳥も

木の子『ごきげんよう』

鳥『なつ子さんごきげんよう』

と口々に答へる。

兎 小さな棒を拾つてそれで拍子を取りながら先頭となり、次になつ子、鳥大勢、その後、手とりあひへ、或は子を取らう子取らうのつながりをして

合唱へサツサ歸りませうよ

母さまのそばへ

此處は魔の森

迷ひの道よ

木兎のお爺さんが捕虜にしますよ

こはい こはい

こはい こはい

こはい……

行列下手へ入りこむ、その後へつらく木兎、引込みまで行きヒヨイと止まり、キョト〜邊を見はし、あわて、上手へ、腰を曲げ、大股にヒヨコリ、ヒヨコリと逃げ込む。木の子切株の上にかへり、その木兎の後姿を見、やがて指して、笑ひこけるうちにしづかに暮下りる。

— を は り —

大正十年五月五日印刷
大正十年五月八日發行

冷光童話集鳩のお家

定價金參圓

著者

大井信勝

東京市神田區嘉神保町九番地

發行兼
副行者

合資會社 富山房

同所 合資會社富山房社長

右代表者

坂本嘉治馬

東京市芝區愛宕町三丁目

印刷所

東洋印刷株式會社

發行所

東京神田

(明治二十九年
六月設立)

合資會社 富

山房

電話神田三〇二四、三七六〇、三六六三番

振替口座東京五〇一〇一番

對幅二の學文年少青的界世

坪新 內進 博諸 士名 校家 閱編
語物學文界世

袖紙泰 珍裝西 布七名 裝百畫 美八寫 十真 錢拾五 本買入 錢二十

庫寶學文西泰

繁野天來先生編 平尾不孤先生編
 ◎ミル 失樂園物語 ◎モリ あわて者、人ざらひ
 杉谷代水先生編 中村春爾先生編
 ◎沙 翁 シマクベス・アラ 約バイブル物語
 正宗白鳥先生編 坪内銳雄先生編
 ◎ホア イリアツド物語 ◎セイア ブラン・ペンアギ

杉谷代水 中島孤島 兩先生譯

希臘神話及北歐神話

袖珍美本五百頁 各種名畫約八十頁 定價金貳圓貳拾錢 郵稅十錢

希臘神話は故杉谷代水先生が畢生の心血を凝ける苦心の名著にして、内容の精と文章の美と明治大正の文壇に比儔少き記念出版にして、曩に數版を重ねて久しく絶版の處、今回縮刷改版に際し、著者の親友中島孤島先生に請ひ、新に北歐神話の起草を求めて之を添へ別に神話解説二十頁を加へ、舊版の挿畫全部を改めて地圖二葉を挿み、全篇に互りて面目を一新せり。我國唯一の大成せる神話書として、西洋文學の研究者は勿論、永く一般家庭の優美なる讀物として歓迎せらるべきは本書なり。

獎推士博學文兩賀芳內坪 入繪譯新家名法流一第代現 庫文庭家範模

我出版界の誇！ 裝幀の絶美挿畫の豐的な花錦よりも美しく、世界の面白き限りを盡せる話の寶殿！

全部十二卷 各卷定價 金三圓八拾錢 郵稅十八錢
各卷五頁 外三色版 寫真至三 百乃至三 裝幀高模 極美高模

1,2 ア ラビヤン 上下	杉谷代水先生譯	3 グ ムリ お伽噺 全	中島孤島先生譯	4 イ プツ 物語 全	楠山正雄先生譯	5 ア センデル お伽噺 全	長田幹彦先生譯
6 ロ ソン 漂流記 全	平田禿木先生譯	7 西 遊 記 全	中島孤島先生譯	8 童話 寶 玉 集 全	楠山正雄先生譯	9 ガ ア 旅行記 全	平田禿木先生譯

慈愛深き父母 其の愛兒の爲に此の上品にして面白く美しき世界に名高き教訓のお伽繪本を求め給ふに吝ならざるべし

久留島武彦
先生著
鐮木清方
先生畫

久留島

お

伽

講

壇

四六版美本三六〇頁
挿畫着色名版十一葉
郵稅四八拾錢
郵稅十二錢

通俗談話界の先覺者久留島先生が十八番とも稱すべき名什十一題を收めたるもの、天真爛漫なる裡に自然の人情を現はし、面白く讀み行く間に微妙の教派に觸れる。眞にお伽噺の上乗である實に家庭最良の讀物である。

東京女子高等師範學校教師 醫學士 青木醇一 先生著

育兒及小兒病の看護

四六判美本三二〇頁
口繪寫眞版四葉入
郵稅四十二錢

家庭必備高等女學校 家專科唯一參考

本書は著者が東京女子高等師範學校に於ける文部省夏期教育會の講演を本とし之に幾多の増補改訂を施し、特に一般讀者の爲に編述せるもので、内容は愛兒の養育兒童の看護、小兒の病、小兒看護の一般四篇より成り、悉く著者自身の實驗と、輒近小兒科學の進歩に應じて、陳舊を棄て斬新なる學理と實驗とを最も平易に述べてあります。近時家庭衛生思想の發達に伴ひ、類書も決して少くはありませんが、本書の如く兒童に關する凡てを網羅し責任と自信とを以て、親切想到に教説し、何人にも徹底的に理解し得るものは斷じて他に無い事を確信いたします。

501
48

終